

佛様は一寸お辭儀をした。

「私は五條西洞院邊にゐる佛ぢや。つねづね評判のお前様の讀經を聴きたいと思つてゐたが、平素は梵天帝釋などのおいてがあるので遠慮してゐた。所が今日はお前様の身體が汚れてゐるから、他様はおいてがない。そこで遣つて來ましたぢや。」

氣がついてみると、道命は前の夜の口をそのまま灑がないで、お經を誦んでゐたのだつた。

机

今の中村歌右衛門の父芝翫は、随分常識外れの妙な癖で聞えた男だが、この俳優の數ある癖のなかで一番面白いのは、そら火事だといふと、どんな遠方でも構はない、印半纏を引っかけ、て直に飛び出した事で、火の粉の散るなかをうろろろ駆けずり廻つて、歸途には茶飯の一杯も搔き込んで、いい氣で納まつてゐたものだ。

今一つ妙な癖は指物が好きで、閑さへあれば何かこつこつと指物師の眞似事をしてゐたが、

手際はから下手な癖に、講釋だけは他一倍やかましく、鉋や鋸などは名人の使つたのでないと手にしなかつた。中でも一番文句が多かつたのは指物に使ふ木で、あてもない、かうでもないと贅を言つてゐたが、一度などは一日土藏に入つてこつこつやつてゐて、日の暮れ方にやつと外へ這ひ出して來た。

「かう見ねえ。立派な煙草盆が出來上つたぜ。」

見ると、歪形の煙草盆を大事さうに掌面に載せてゐる。もしやと思つて土藏を覗いてみると、女房が一番大事の唐木篋筒をすつかり引つ剝してしまつてゐたさうだ。

噂によると、國學者のNさんもよく指物をした。洒落た机が拵へたい、夫には伐つてから百五十年以上経つた材木で無いと、狂ひが出來るからといつて、方々捜し廻つてゐるうちに、下谷の古い薬舗で恰好な看板を見つけて、やつと夫を手に入れるには入れた。

脚には何がよからう。名人の吹いた尺八が面白からう。さうだ、夫に限るといつて、閑にまかせて方々道具屋を尋ね歩いた。

「お店には名人の吹いた尺八がありますまいか。四本ばかりでいいんだが……」
仕合せと道具屋は名人を拵へる事にかけては、その道の師匠よりもずつと傑れた腕を持つて

みるので、Nさんは十日も経ぬうちに名人の吹いた尺八を三本までも手に入れた。
だが、机の脚は馬の脚と同じやうに四本無くてはならない。あとの一本を發見するためにはNさんは二週間も無駄足を踏ませられた。男が女を忘れるには、三日あれば十分だ。女が男を忘れるには、七日で不足はない筈だ。二週間も経つ間に、Nさんはすっかり机の事を忘れてしまつた。忘れてよかつた。すべて自分に都合の悪い事は、忘れるに越した事はないのだから。

お

水

大阪の一心寺に、元和の往時天王寺で討死した本多忠朝と家來九人とを葬つた墳のある事は、誰もがよく知つてゐる筈だ。

忠朝は生きてゐる間は、鐵の棒を揮りまはす外には何の能も無かつた男に相違ないが、死んでからは面白い内職にありついてゐる。内職といふのは、禁酒の願を聞くといふ事なのだ。一體男に禁酒させるのは、女に有難がられる第一の功德で、世の中の仕事といふ仕事は澤山ある

が、女に有難がられる仕事ほど行き甲斐のあるものは無い。

忠朝の墓前に小さな壺があつて、いつも蓋がしてあるが、中には銀のやうな水が溢れてゐる。酒を斷たうとする者は、その水を戴いて飲むと、何時の間にか酒嫌ひになるといふ事だ。

ある日其處を通りかかると、頭を島田に結つた十七八の女が、壺から水を掬んで、家から持つて來たらしい硝子瓶に入れてゐるのがあつた。

「何うするんだね。」

と訊いてみると、

「うちの旦那はんが、酒癖が悪うおますよつて、ぶぶうに入れて上げるのだつせ。」

と、女は救世主のやうな、おせつかいな顔をして私を見た。實際女といふものは、男の知らぬ間に、その食物のなかに色々な物をつまみ込むのが好きで溜らぬらしい。夫が酒斷さかだちの水であらうと、鹽であらうと、莫兒比涅であらうと、みんな持合せのおせつかいからする事なので、男は目を閉つて謹んでそれを戴かなければならぬ。

ハウプトマンの「沈鐘」を讀むと、鐘師のハインリツヒが山の上で怪しい女と酒を飲んで踊つてゐるところへ、村に残した子供二人が大事さうに小さな瓶を提げて坂を上つて來る。瓶の

なかには何が入つてゐるのだと訊くと、悲しさうな顔をして

「母様の涙ですわ。」

といふ條がある。

母様の涙は少し鹹つばいが、忠朝の墓の水は冷つこい。どちらも妙に酒飲みの阿父さんには効力がある。

奉納

ある彫金家が法隆寺の峯の薬師で取調べたところに據ると、お薬師様に奉納物の鏡には、随分傑れた価値のものも尠くなかつたが、同じ献上物の刀劍は皆なまくらで、鏡と比べたらんで談話にもならなかつたさうだ。峯の薬師は祈願を籠めると、靈驗のあらたかなので聞えた佛様で、大願成就の曉には、その祈願者の身につけてゐるうちの、一番大切な物を奉納しなければならぬ言傳へになつてゐる。

身に着けてゐるうちの、一番大切な物といふと、往時はいふまでも無く、男には刀、女には鏡で無ければならなかつた。といふ譯で、峯の薬師には刀劍と鏡とがどつさりあつて、何れも素晴らしい名作揃ひだといふ噂だつたが、調べてみると、鏡には逸品が鮮くないのに、刀は揃ひも揃つてなまくらばかりだとは、飛んだ愛嬌である。

これで見ると、女には正直者が多いが、男には佛様の前でもペテンを行き兼ねない手合が少くないといふ事になる。願を掛けて願が叶ふ。掛けた當座は腰の業物を奉納しようと思つてゐながら、願が叶ふとつひ夫が惜しくなつて、飛んだ賈物で胡麻化してしまふ。お薬師様が刀の鑑定に下手で、おまけに無口だから可いやうなものの、若しか犬養木堂のやうな鑑定自慢で、口汚い佛様だつたら溜つたものではなからう。

醜女の家

伊勢の山田から二里ばかりの在所に、磯村といふ土地がある。言ひ傳へによると、白拍子静

が母の磯禪師は、ここに住んでゐたのださうで、禪師の血統は其後も傳はつてゐるが、産れる娘は皆醜婦揃ひである。

これは靜が人並外れた美人だつたので、多くの男にも苦勞をさせ、女自身にも悲しい夢ばかり見せて來たのを思ふと、もう美人には懲り懲りだとあつて、

「娘が生れます事なら、いつそ醜女にしてやつて下さい。」

と神様に祈願を籠めたのが、引請けられたからださうだ。

美人を生ませて下さいと、願を籠めたところで、神様は滅多に承引しては下さらないが、醜女を孕ませて下さいと頼むと、大抵はお引請けになる。お引請けになるのは、何も神様の手並が拙くて醜女の方が手頃なからではない。神様は女に哲學を教へようとせられるからだ。

女は美人に生れると、悲哀が多い。「藝術」が必要な所以だ。醜女に生れると、絶念めなければならぬ。「哲學」が無くてはならぬ譯である。

心得

心 新橋の老妓M子が、そのむかし、雛妓として初めて座敷へ突き出された時、姐さんから、假にも妓の忘るまじき三箇條の心得を説き聞かされた。

三箇條といふのは、第一、お客の悪てんがうに腹を立てぬ事。第二、晴衣の汚れを氣にしない事。第三、七里けつばいお客に惚れない事。萬一惚れねばならぬ時は、成るべくよぼよぼの老人を見立てる事。

得 M子は、この三箇條の心得をちやんと頭に疊み込んでお座敷に出た。M子はその頃まだ男よりも、チヨコレエトの方が好きな年頃だつたので、お座敷で客に惚れる程の冒険はしなかつた。よしんばどんな冒険好きな妓があつても、チヨコレエトの代りに男に惚れるやうな心得違ひはしない筈だ。妓といふものは、十人が十人、先づチヨコレエトを喰べてしまつて、それからそろそろ男に惚れるものなのだ。

だが、M子はあとの二箇條には、お座敷へ出ると早速ぶつつかつた。其の時のお客は若い醫者で、どんな醫者にも共通な自惚だけはたつぷり持合せてゐた。で、耳を噛んだり、鼻先を押へたり、色々な戯けたまねをしてM子に調弄つた。

M子はてんで頓着しなかつた。夫が癢に觸ると言つて、お客はM子の頭から熱癩の酒をぶつ掛けた。酒は肩から膝一面に流れた。紅い長襦袢の色は透綾の表にまで滲み透つて來たが、M子は睫毛一つ動かさうとしなかつた。

姐さんは夫を聞いて大喜びに喜んで代りの晴着を拵へて呉れた。お客は酔から醒めて、眞青な顔をして謝りに來た。匙加減や見立違ひで人を殺しておいて、訛言一つ言つた事のない醫者にとつては、謝りに來るのは魂を嘔吐すよりも苦しかつたに相違ない。

焼 棒 杭

神様の數多い作品のなかで、女が第一の傑作であるといふ事は、多くの婦人雑誌が主張する

所で、自分も夫に就いては少しも異議はない。女の美しさ。——それだけでも十分なのに、おまけにまた女の狡さ。これを傑作と呼ばないのは盲目である。

かういふ神様の傑作も、竈の前へ置きつ放しにしておくと、いつとなく煤ばんで來る。すると、淺はかな男心は直にがらくたでも扱ふやうに、ぞんざいな風を見せて、何うかするとその存在までも忘れたりする。

この頃洋字新聞を見ると、ある男女が結婚して四五年経つと、互に鼻に付き出して、顔を見るのも厭になつた。そこで寧ろ別れようといふ事で、日を定めて辯護士の許に落合つて、其の手續をする事に談話を運んだ。

その日になつて、女は素晴しく着飾つて來た。身動きする度に衣摩れの音がして、麝香猫のやうな香がぶんぶんするので、男は眩ひがしさうになつて來た。

「見違へる程美しいぢやないか。何うしたんだね。」

「いいえね、貴方にお別れすれば、獨身でも居られないしと思つて、嫁入口を捜しに往つて來たんですわ。」

「怖しく早手廻しだな。良いのが見つかったかい。」

男は吐き出すやうにいつた。

「あら、もう御存じなの、貴方にも宜しくつて言つてたわ。」
女は一寸笑つてみせた。

男はいきなり女の手を取つて、少し相談があると言つて辯護士の家を出て往つた。三十分後には、この二人は活動寫眞館に入つて、夫婦鳩のやうに肩を並べて戯け散らしてゐたさうだ。謹んで世上の女に告げる。男は皆かうしたものだ。彼は「女」の鑑定家としては、最も與みしやすいやくざ者である。

鯛

劇評家のAさんは剽軽な面白い爺さんだが、夫人はなかなかのしつかり者なので、お尻の長い友達などは、ふだんは餘り寄りつかない癖に、夫人が不在だと聞くと、直ぐに駆けつける。Aさん自身も夫人が旅立ちでもすると、

「おい、女房が不在になつたから遊びに来ないか。」とよく使を出して催促したものだ。

ある夏の事、御多分に洩れぬKといふ老人が、夫人の不在を覗つて無駄話に尻を腐らせてゐると、表を鯛賣が通つた。K老人は急に話を止めた。

「おい、Aさん。那の鯛を呼んでくれ、今日は拙者が一つ御馳走をしたいから。」

鯛を買つた老人は、葱を買ひに主人を近所の八百屋へ走らせた。茶氣のあるAさんは、一錢がとこ葱を提げて嬉しさうに歸つて來た。平素女房にいたふられてゐる亭主は、女房の不在に臺所の隅で光つてゐる菜切庖丁や、葱の尻つぼなどに觸つてみるのが愉快で溜らないものだ。

「いい葱だ。Aさん。氣の毒だが、序でに扇子の古いのを一本めつけて呉れないか。」

「扇子？扇子をどうするんだい。」

Aさんは、片手に葱をぶら提げながら、神聖な夫人の居間を捜して、破けた扇子を一本持ち出して來た。

K老人は料理人がするやうに、手拭を襪に袂を絞つて、臺所で俎板を洗つてゐた。

「や、御苦勞、御苦勞。ぢや、君は其處で見てゐ給へ。鯛はかうやつておろすものなのさ。」

老人は無駄口を叩き叩き、古扇子の骨の間に鯛の骨を挿んで、さつと扱くと、魚は器用に三

枚におろされた。

「なる程、巧いもんだな。」

Aさんは、松助の枯れた藝を賞める折のやうに、禿頭をふりふり感心した。

小一時間も経つた頃、やつと鯛の「ぬた」が出来上つて、食膳の皿に盛られると、味利きだといつてK老人は一箸頬張つて、口をもぐもぐさせてゐたが、急に變な顔をしたと思ふと、はたと膝を叩いて笑ひ出した。

「失敗つた。あんまり急いだもんだから、鯛の鱗をふくのをつつかり忘れちやつた。」

「なに、鱗をふくのを忘れたつて……」と言つて、Aさんも箸をつけたが、「そんなでもないや。うまく出来てるぢやないか。」

と、そのままむしやむしや食べ出した。ほんたうに鯛の鱗はとつてなかつたが、不斷女の刺のある言葉を食べつけてゐる者にとつては、魚の鱗などは何てもなかつた。

死人の下駄

人間といふものは、生れて来る時に下駄を穿いて來なかつたせゐか、身投でもして死ぬる時には屹度履物を脱いでゐる。それもそこらへだらしく投げ出さないで、きちんと爪先を揃へたまま脱ぎ捨ててゐる。まるで借りた物を返すといった風だ。得て身投でもする人は、借りた金を返さないやうな輩に多いが、履物だけは自分の持合せでありながら、借物でもあるやうにきちんと取揃へてゐる。だから芝居でも夫に倣つて、舞臺で情死者の身投をする時には、俳優は極つたやうに履物を揃へる。

それも古風な身投などの場合に限らず、電車や汽車で驟死をする場合にも、履物だけはちやんと揃へてゐるから可笑しい。どんな粗忽家でも下駄を履いた儘で、軌道に飛び込むやうな無作法な事はしない。鴨が毛皮を脱いで鴨鍋へ飛び込むやうに、自殺でもしようといふ心掛のある者は、履物を脱ぎ揃へて軌道に横になる位の儀式はちやんと心得てゐる。

電車の車掌なども、轢死者があつた場合には、それが男か、女か、老人か、子供か、馬鹿か、伶俐かを吟味する前に、先づ履物を調べる。そして履物がちゃんと揃へて脱ぎ捨ててあるのを見ると、

「占めた。やつぱり自殺だつた。」

と、吻と胸先を撫ておろすさうだ。だから間違つて電車に轢き殺される場合には、成るべく履物を後先へ、片々は天國へ、片々は地獄へ届く程跳ね飛ばす事だけは忘れてはならない。さもないと自殺に定められて、慰藉金も貰はれない上に、理窟の立たない厭世観さへ抱かされるやうな事になるかもしれない。

同じ淵でも、身投をする場所は大抵定つてゐるやうに、長い電車線路でも、轢死する場所は大抵見當がついてゐるさうだ。だから、賢い運轉手になると、その區間だけは速力の加減をする事を忘れない。

高野の英靈塔

工學博士田邊朔郎氏は、軍人軍屬のためには靖國神社を始め、いろいろの鎮魂たましづめの道具があるのに、學者や藝術家にはそんな設備が少しも無いのは、國家として、國民として片手落な次第だ。これだけは是非何とかしなければといふので、近々高野山に素晴しく大きな英靈塔を建立する考へださうだ。

考へは結構だが、自體學者や藝術家などといふ連中には、旋毛の曲つたのが多いから、英靈塔を建てたからといつて、其儘成佛はしなからう。尤も學者や藝術家は生前忙しく暮したせいで、まだ高野山を見ないで死んだ輩も多からうから、博士の手で招待でもしたら、その人達の靈魂も一度は屹度登山するに相違ない。

高野山には、色々な人の骨がたと納まつてゐる。あれは彌勒出世の曉には、弘法大師が皆の手を執つてお迎へに出られる誓願があつたからださうだが、大師の考へでは、高々三十人位

の積りらしかった。今のやうにたんと納まつては始末に困るだらう。そんな事から彌勒菩薩も今では一寸顔出しが出来なくなつたらしい。

むかし、熊阪長範が山で一稼ぎする積りで、夜が更けて高野へ登つた事があつた。大きな伽藍はすつかり門を閉ぢてゐるなかに、唯一つ小さな灯の見える所があつた。覗いてみると、皺くちやな坊さんが一人立つてゐて、附近には人間の骨がごろごろ轉がつてゐた。長範は自分が盗みに來た事も忘れて、わけを訊くと、坊さんは例の彌勒出世の大師の誓願を説いて聞かせた。

長範はそんな事なら、自分も一緒に願ひ度いと言ひ出した。長範の腕は盗みをするだけに寸も長かつたし、納骨には打つて附けの代物であつたが、山でもまだ一稼ぎしなければならぬので、一寸出し惜しみをした。で、石でもつて前歯を一つ叩き折つた。

「それぢや、前歯を一つ納めて置ませう。どうぞお忘れのないやうに。」

と言つて駄目をおして其の歯を坊さんの掌面に載せた。前歯はこれまで幾度か嘘を吐いた歯ではあつたが、その歯が一本無くなつたからといつて、この後嘘を吐くのに別段差支へる譯でもなかつた。

長範は好い物を納めた。だが、時期が少し早過ぎたやうだ。もつと齧をとつて、入歯をする頃にしても遅くは無かつたのだ。彌勒は今だにぐづぐづしてゐられるから。

蟲の聲

むかし、公家の某が死にかかつてゐると、不斷顔肥懇の坊さんが出て来て、(醫者が來るのが遅過ぎる時には、きつと坊主が來るのが早過ぎるものなのだ。) 枕もとで珠數をさらさら鳴らしながら、

「早く念佛をお唱へなさらなくつちや。さもないと、中有でお迷ひになるかも知れませぬぞ。」と、甚く心配さうな容子で、最後の念佛を勧めにかかつた。

看護の者がべそを掻いたやうな顔をして、

「中有と申しますと……」

と訊くと、坊さんは嘘をつく者に附物の小鼻を妙にびくびくさせて、

「廣い荒野でな。西も東も判りませんぢやて。」
と、低聲で答へた。

その談話を苦しい間にも病人が洩れ聞きをした。病人は骨張つた顔を坊さんの方へ捻ぢり向けた。

「お上人。そんな荒野にも秋が來ますと、蟲が鳴きませうな。」

お上人は急に行詰つたやうな表情をして、てれ隠しに一寸空咳をした。無理もない中有の野に蟲が居るか居ないかといふ事は、どのお經にも書いてなかつた。お上人はもしか間違つてゐたら、お布施を返す積りでひとりぎめの返事をした。

「さやうさ。野といひますからには、蟲もゐるにはゐるでせうて。」

公家は死顔に寂しさうな笑を洩らした。

「蟲さへ居る事なら、中有とやらに迷つてもいいと思ひます。だからお念佛だけは申しますまゝい。」

坊さんは苦笑をして口の中でぶつぶつ言つてゐたが、病人はたうとうお念佛の一遍も唱へないで亡くなつてしまつた。その中有の野とやらには、蟲が居たか居なかつたか、今だにはつきりしない。

赤 梅 檀

赤 梅 檀
むかし、觀世家に豊和といつて、家の藝は素より香聞かうききにもいつぱし聞えた男がゐて、金春流の某と仲がよかつた。で、閑な折にちよいちよい遊びに往くと、金春家では香好きな豊和への御馳走とあつて、いつも秘藏の香を炷たきいてくれたものだ。

檀 豊和はそれを嗅ぐたんびに、

「どうも素的な香だ。何でもいはく附きの物に相違ない。」

とは思つたが、迂濶に言ひ出して、主人に物惜みをされても詰らないと思つて、わざと黙つてゐた。言ふ迄もなく、金春家の主人は香道にはぶぶの素人であつた。

ある時、香道の家元蜂谷貞重が江戸へ下つて來た。豊和は蜂谷の顔を見ると、懐中から懐紙に包んだものを取出して、蜂谷が生命より大切な鼻を引拗るやうにして、それへ押しつけた。

「一寸きいてみて呉れ給へ。實はこなひだから君が下つて来るのを待ちくたびれて居たのだ。」
紙包みは豊和がこつそり金春家から取つて來た香爐の灰であつた。

蜂谷は自慢の鼻を一寸その灰に近づけたかと思ふと、眼を圓くして吃驚した。

「これは赤梅檀だよ。何うも素的なものを炷いてるね。」

「え、赤梅檀だつて。」

豊和直ぐに表へ飛び出して、金春家を訪ねた。

豊和は何氣ないさまで、色々と世間話を持出してゐたが、ふと思ひ出したやうな口ぶりで、

「時に近頃御無心の次第だが、こなひだぢゆういつもお炷きになつてゐたあの御秘藏の香ですな、あれを少しばかり戴かれますまいか。」

と、切り出した。

金春の主人は、何のことかと思ふと、香の話なので、

「いや、お安い御用で……」

と、その場で件の香を小指のさきほど割つて與へた。

豊和はそれを左の掌面で戴いたかと思ふと、しかと右の掌面で押へつけた。そして嬉しまぎ

れに大きな聲でわめいた。

「有難う。今だから言ふが、この香こそ名代の赤梅檀ですよ。」

「なに、赤梅檀……」

金春家の主人は、直ぐに手を延ばして件の香を取り戻しにかかったが、豊和は手ばやく内ふところにしまひ込んでしまつた。

骨董好きの富豪に教へる。いつまでも秘藏の骨董を失ふまいとするには、自分達の家族を成るべく物識にしておくが一番手堅い。

隠し藝

蕪村の畫の門人に田原慶作といふ男があつた。ある日の暮れ方に師匠を訪ねると、蕪村の家では戸を締め切つてゐた。宵つ張りの師匠なのに、今日に限つて早寝だなど慶作は思つた。(蕪村が宵つ張りなのに何の不思議はない筈だ。彼は畫家であるとともに、夜更しがつきものの俳

諧師でもあつた。

慶作は出直さうと思つて、逡巡してゐると、寢鎮まつた筈の家の中から、ばたばた物を叩く音がして、折々何か掛聲でもするらしい容子が聞えた。

「怪體やな。一遍訊いてみようか。」

慶作はとんとんと表戸を叩いてみた。

すると、内から「どなた？」といふ聲がして、扉は静かに開けられた。確に蕪村の聲に相違ないので、慶作は不審しながら入つて往くと、そこらぢゆうに箒や塵はたきがごたごたと取り散らされて、師匠はひとりてくすくす笑つてゐた。

わけを訊くと、女房は娘と女中とを連れて、逗留がけて里へ歸つて往つたので、その留守に一寸芝居の眞似ごとをしてゐたとのことだつた。

「こなひだ芝居の芝居を見て、すつかり感心させられたもんやさかい、ちよつくら眞似をしてみたが、なかなか出来やらんわい。」

蕪村は聲を出して笑つた。

京都のある法學者は、家族がみんな不在になると、すつくと逆立になつて、書齋からのそり

のそりと這ひ出して来て、玄關から臺所まで一廻りして来る癖がある。法學者だけにこの男もいろんな事に理窟をつけないでは承知しないが、たつた一つこの逆立だけには理窟をつけてゐない。理窟が無い筈だ。本人の積りでは逆立は藝術ださうだから。

男といふものは、女房の居る前では公然に行りかねる「藝術」をそれぞれもつてゐるものだ。芝居の眞似事だらうが、逆立だらうが、女房が不在になつたら、さつさとお浚へをするが可い。——これは女にしても同じ事だが、女はかういふ時には、大抵パン菓子を食べるものらしい。それにしても立派な藝術だ。

大 き な 鼻

むかし、通尖上人といふ坊さんがあつた。内外諸宗にわたつて博識の名が隠れもなく、自分にも大分それを自慢に思つてゐた。

ある秋の夜の事、お説教が濟んで、上人はひどく氣持が善ささうな顔をしてゐた。一體お説

教とか講演とかいふものは、よく出来た場合には聴衆ききやうよりも演者の方がずつと氣持のいいもので、基督のやうな眞面目な男でさへ、名高い山の上のお説教を済ました後では、すつかり好い氣持になつて、氣の毒な癩病患者などをも直ぐに癒してやつてゐた。だから、お説教の済んだあとで、

「どうもすてきてした。皆もすつかり感心しちまつて、もつと何か聴きたさうにしてゐますよ。」とでも言つてみるがいい。坊さんは屹度お袈裟の袖をたくしなから、手品の隠し藝でもして見せるに極つてゐる。

通尖上人はすつかり上機嫌で、この分ぢやどんな難問が出ようとも、直ぐに解いて呉れよう。ほんたうに吾ながら偉い博識もくしになつたものだ、高慢さうな顔つきで附近おきりをじろじろ見まはしてゐると、だしぬけに隔ての障子が破れて、なから大きな鼻が一つ飛出した。おやと思ふうちに、鼻はまたすつと引込んで、障子はもとのやうになつた。

流石の通尖も、これには度膽をぬかれてしまつた。變な顔をして暫く眼をぱちくりさせてゐたが、すうと席を滑り下りたと思ふと、その儘見えなくなつてしまつた。あとでよく調べてみると、大樹寺といふのに入つて、專修念佛せんじゆねんぶつの行をおこなひ済ましてゐたさうだ。よくよく自力には懲りたものと見える。

唾

希臘のある皮肉哲學者が、富豪に饗はれた事があつた。哲學者が富豪に思想を説きたがるやうに、富豪はまた哲學者に自分の住んでゐる世界を見せびらかしたいものなのだ。

その富豪も皮肉哲學者に自分の邸宅を自慢したいばかりに、飾り立てた客室から、數寄を凝らした剪裁の隅々までも案内してみせた。

「如何でげせう。これでも先生方のお氣には召しますまいかな。俺わしとしては相應趣向も凝らした積りなんてげすが……。」

かういつて富豪はその大きな顔を、哲學者の方へ捻ぢ向けた。

哲學者は夫には何とも答へないで、いきなり痰唾を富豪の顔に吐きかけた。富豪は西洋茄子のやうに眞紅になつて憤つた。

「何をしなさるんだ。他の顔に唾をしかけるなんて。餘りぢやごわせんか。」
 皮肉な哲學者は落つき拂つたもので、

「いやはや、餘り結構づくめなお郎なんで、唾が吐きたくなつても、何處にも恰好な場所が見
 つからないもんですから、つひお顔を汚しましたやうな譯で……」
 と別に謝らうともしなかつた。

勿論いつの時代でも、富豪の顔と靈魂とは、數あるその持物のなかで、一番汚いに極つてゐるが、それに唾を吐きかけたのは、流石に皮肉哲學者の見つけ物である。

一番無難なのは、哲學者なぞ御馳走しない事だが、もしたつて饗ばなければならぬとする
 と、(澁澤男が孔子を先生扱ひにするやうに、一體富豪は哲學者が好きらしい。何故といつて、
 孔子は色々難しい事を聽かせて呉れる上に、滅多に金を貸せなぞと言はないから。) 何を忘れ
 ても痰壺だけは用意しておく事だ。

紋

紋所といふものは、もとは車の紋から起きたといふ説があるが、眞實のことか何うだか知ら
 ない。徳川家が葵を紋所に用ゐるやうになつたのにも、色々な拵へ物の傳説がある。

酒井家の説によると、家康の祖父清康が岡崎にゐた頃戦があつた。酒井家の主人は氣の利い
 た男だと見えて、その折圓盆に勝栗を盛つて主人の前へ差し出した。

清康は夫をじつと見て、

「ほほう、勝栗ぢやの。これは縁起がいい。」

といつて、硬つばしい掌面に夫を取り上げたかと思ふと、ばりばりと音をさせて噛んだ。

栗の下には葵の葉が二三枚敷いてあつた。その日の戦は無事に徳川家の勝となつたので、清
 康は記念に葵の葉を紋所に使ふやうになつたといふのだ。

本多家ではまた異つた傳説を持つてゐる。本多家の祖先某は、もと賀茂の社家であつたが、

豊後の本多荘に流されたので、本多を名乗るやうになつた。

賀茂の社家だつただけに、本多家では二葉葵の紋所を使つてゐると、それを清康が見て、「いい紋所ぢや、俺の家で使ふ事にしよう。」

と言つて、勝手に取り上げてしまつた。もともと賀茂の二葉葵には長い葉莖がくつ附いてゐるのだが、清康はそんな物は無益だといつて摘み切つてしまつた。家康の祖父おぢいさんだけに、こんな事にも儉約しんやくだつたと見える。

ラフカデオ・ヘルン、またの名小泉八雲氏は、時たま日本服を着る事があつたが、羽織の紋にはヘルンといふ自分の名からもじつて、蒼鷺をつけてゐた。鷺はヘルンの紋として恰好な動物であつた。

京都に若い畫家があつた。畫が拙かつた故か、度々女に捨てられた。だが、何うしても絶念められなかつたものと見えて、羽織の紋所には、捨てられた女五人の名前を書き込んで、平氣でそれを被つてゐた。羽織は最初に見捨てた女が拵へてくれたもので、地は薄かつたが、女の方よりは長持ちもしたし、價段も幾らか張つてゐた。

男 装 婦 人

獅子や驢馬と共同生活を営んでゐた佛蘭西の女流畫家ロザ・ボナアルは、何處に一つ女らしい點のない生れつきで、夕方野路でも散歩してゐると、野良がへりの農夫達は、

「へい、檀那樣。今晚は。」

と叮嚀にお辭儀をして、別れ際に後をふりかへつてみて、

「あの小柄な檀那樣は、いつも今時分この邊を徜徉びらいてござるな。」と朋輩に言ひ言ひしたものださうだ。

米國にメエリイ・ラルカアといふ有名な婦人がある。この婦人は別の事でもつと聞えてもよいのだが、幸か、不幸か、いつも男装をしてゐるので、それで一層名高くなつてゐる。

なぜ男装してゐるかに就いて、この婦人の答へは至極はつきりしてゐる。

「私にとつては女着の袴すかあこよりも、ズボンの方がずつと氣持がよござんすから。」

尤もな理窟で、かういふ勇氣のある婦人は、素足がズボンよりも氣持がいい事を知つたら、思ひ切つてそのズボンをも脱ぎ捨てるかも知れない。

ある時、この婦人がマサチウセツツの某市へ旅をした事があつた。途中で道を迷つて甚く當惑してゐるところへ、農夫が一人通りかかつた。農夫といふものは、どんな時にも、どんな所へでも、よく通りかかるもので、基督がお説教をしたがつてゐる時にも、追剥が物を欲しがつてゐる所にも、えて農夫がそこへ通り合はせる。そして靈魂を奪られたり、外套を引つ剥がされたりする。農夫といふものは、四福音書へ出るにも、探偵小説へ出るにも、極日當が廉くて、おまけに物が解らないから、手数が掛らなくていい。男装婦人はその農夫に訊いた。

「一寸お訊ねしますが、某市へはこの道を往きますか。」

「ああ、おつ魂消た。」

農夫は眼をこすりこすり言つた。

「俺はあ、何にも知んねえだ。お前様のやうな女子みたいな男初めて見ただからの。」

獨身儒家

西依成齋は肥後生れの儒者で、京都の望楠書院で鳴らし、攝津の今津にも十年ばかり住んでゐて弟子取りをしてゐたので、京阪ではよく名前が通つてゐた。

その成齋の弟子に、度々色街へ出かけて、女狂ひに憂身を賣してゐる男があつた。いろいろ兩親が意見をして見ても、一向効力が無いので、

「一つ先生様の御力で……。」

といふ事になつた。

成齋はその弟子を呼びつけた。そしてたつた今朱文公に會つた歸り途だといふやうな生眞面目な顔をして、

「お前は此頃頻りと色町に出浮くさうだが、怪しからん事だ。以後は屹度愼んだがよからう。」と高飛車に叱りつけた。

弟子は先生の劍幕がひどいので、両手を膝の上に揃へて、鼠のやうに縮み上つてゐると、成齋は變な眼つきをして、その手首を見つめた。若い弟子の手首は、妓の握り易いやうに繊細に出来てゐた。

「廓通ひといふものは、第一金がかかるばかりでなく、身體の養生にならない。俺などはそんな遊びを止めてから、今年でもう廿年にもなるが、其故かしてこんなに達者になつた。」
 と言つて、先生は大きな兩手を、弟子の鼻先でふり廻してみせた。成程腕つ節は勁さうに出来てゐるが、その二十年といふもの金なぞたんまり握つた事の無ささうな掌面てのひらだなど弟子は思つた。

弟子は怖る怖る先生の顔を見た。

「有難うございました。お言葉は夢にも忘れないやうに心掛けませう。」
 といつて叮嚀にお辭儀をした。

「ついでには一寸伺ひますが、先生は當年お幾つでいらつしやいます。」

成齋は案外叱言の効力が早かつたのと、自分の達者な腕つ節とに満足したらしく、聲を揚げて笑つた。

「俺かの。俺は當年九十三になる。」

「してみると……。」

弟子は先生が道樂を思ひ止つたといふ二十年前の齡を繰つてみた。そして眼を圓くして驚いた。言ひ忘れたが、成齋は生涯獨身で暮した男であつた。

明恵と雑炊

梶尾の明恵上人は、雑炊の非常に好きな人であつた。ある時、弟子の一人が師僧を慰める積りで、心をこめてうまい雑炊を拵へた。

明恵は何氣なく膳に對つたが、好物の雑炊が目につくと、につこりと笑つた。そして、

「今日は御馳走だな。」

といつて、弟子の顔を見た。弟子は師僧の氣に入つたのが嬉しいと見えて、剃りたての圓い頭を下げてお辭儀をした。

「お上人様が平素からお好きでいらつしやいますから。」
明恵は箸を取つて一口頬張つたと思ふと、右手の指先で障子の棧を目にもとまらぬ速さで一
寸撫でた。弟子が吃驚して見てゐると、明恵は何喰はぬ顔でその指先を嘗めて、それからまた
雑炊を食べようとした。

「蠱だらうかな。」

と弟子は考へたが、これまで一度だつてそんなそぶりを見た事が無かつたので、不思議さうに
訊いた。

「お上人様。つかぬ事をお訊き申すやうですが、たつた今貴僧様は障子の棧を撫でて、それを
お嘗め遊ばしました。あれは何のお蠱でございますか。」

明恵は尼さんのやうに口を窄めて笑つた。

「いや、蠱でも何でも無い。そなたが拵へて呉れた雑炊が餘りうまいものだから、つひ障子の
埃を嘗めたのだ。」

成程障子の棧を見ると、埃が白く溜つてゐた。埃は正直なもので、掃除をなまけると、直ぐ
に溜るものだと、そんな場合にも弟子は思つた。だが、雑炊がうまいからといつて、その埃

まで嘗めなければならぬ理由が判らなかつた。

明恵は言つた。

「餘り雑炊がうまいので、つひ染着心でも出来ては怖いと思つたものだから、そんな事の無
いやうに、一寸埃を嘗めたまでだ。」

栗 鼠

ある薩摩の殿様に、九十を過ぎて、いろいろの道樂に憂身を寢さないでは居られないやう
な達者な人があつた。

數ある道樂のうちで、殿様は一番變り種の小鳥や獸が好きで、自分の力で手に入れる事が出
来る限り、いろんな物を飼つて娛んでゐた。

英雄僧マホメツトも、ひどく小猫を可愛がつたもので、ある日衣物の裾に寝かしておくと、
不意に外へ出掛けなければならぬ事件が持ち上つた。だが、可愛い猫を起したくはないとい

ふので、マホメットはわざわざ大事の衣物の裾を缺てつみ切つて起ち上つたといふ事だ。
政治家のリセリウもまた愛猫家として聞えてゐるが、死ぬる時には遺言で莫大の遺産金まで猫に呉れてやつた。猫がその遺産金をどう費つたかは、自分がその相談に與らなかつたから、よくは知らないが、唯愛國婦人會や赤十字社に寄附しなかつた事だけは事實らしい。

薩摩の殿様は、ある日籠のなから、栗鼠と梟とを取出させて喧嘩をさせてみた。栗鼠も梟もしようことなしに喧嘩をおつ始めたが、栗鼠はふだん殿様が自分を可愛がつてくれるのは、自分の藝が見たいからだらうと思つて、籠のなかでとんぼ返りばかり稽古してゐたので、こんな喧嘩にはすつかり用意が缺けてゐた。で、梟のために散々に啄かれた。

栗鼠は逃足になつて、いきなり殿様の懷中に飛び込んだが、悔しまぎれにいやといふ程主人の齧を噛んだ。

殿様はそのせゐで四五十日ばかり傷療治をしなければならなくなつた。傷が治つた後でも別段賢くはなつてゐなかつた。賢くなるには餘りに蹄を取り過ぎてゐたから。老人といふものは、こんな場合にも、栗鼠が狂者だつたとか、齧がうつかりしてゐたとか、得てして言譯をしたがるものなのだ。

廣 告 欄

英國の文豪キプリングが、ある時米國の雑誌が見たいから、五六種送つて欲しいと、紐育にゐる友達の許へ頼んでよこした事があつた。

米國の雑誌は、いづれも廣告の頁がどつさりあるので知られてゐる。キプリングの友達は、幾らか郵税を儉約したい考へから、廣告の頁だけ引裂いて、残つた内容を一纏めにして送つて寄した。

キプリングは包みを解いてみると、雑誌はみんな廣告の頁だけ引き裂かれてゐる。何故だらうと小首を傾けたが、それが郵税の節儉しよっからだと聞いて、文豪はぶつぶつ憤り出した。

キプリングの言ひ條では、米國の雑誌は廣告欄が面白いので取柄がある。内容と廣告とどつちにも新智識が多いと訊かれたら、誰だつて選擇に迷はない筈だ。

「そんなに郵税が節儉したかつたら、内容の方だけ引裂いて呉れたらよかつたのに。」と、友達

まで不平を申込んださうだ。

記者へこまざる

茶話全集

トルストイ伯は、その名著「アンナ・カレニナ」のなかで、寒爾維對土耳其の紛紜から、もしか戦争でもおつ始まるやうだつたら、筆一本で喧しく主戦論を吹き立てた人達だけで、別に中隊を組織して、一番前線に夫を使ふ事にした。

「すると、屹度素晴らしい中隊が出来る。」と皮肉を言つてゐる。

イダ・ハステツド・ハアバア女史といふと、婦人參政權の賛成論者としてかなり名を賣つてゐるが、この女が最近紐育の有名な新聞記者に會見を申込んで來た。それはこの記者を生擒にして新聞紙の上で熾に賛成論を書き立てさせたら、屹度効力があるだらうと思つたからだつた。

「婦人參政權ですつて？今時そんな下らない……」と新聞記者は吐き出すやうに、「もしか私

達の國が、歐洲戦争に引張り出されるとして、誰が武器一つ取る事を知らない輩に投票なんかするもんですか。」とそつ氣なく言つたが、相手の険しい顔色を見ると、一寸調弄つて見たくなつて「奥様。あなただつたら何うなさいます、もしか戦争でも始まりましたら。」

「はい。あなたのでいらつしやる通りにやりますわ。」

夫人は急に牝馬のやうに鼻息を荒くした。

「お國の爲めだからつて、他の人達はみんな戦線に立つて血を流すやうに書き立ててさ。そして自分一人は編輯室の安樂椅子に踏ん反りかへつて居ませうよ。」

男のお産

男のお産

むかし、大森元孝といふ醫者があつた。すべて醫者といふものは、診断が拙からうが、學問が無からうが、唯病家へ往つて落つき濟まして居さへすれば、それで良い評判を取る事が出来るもののだが、不仕合せにも、この元孝は性來ひどい慌て者だつた。

ある時、松平大學頭の徒士かぢざむらひが病氣に罹つて招びに來た。元孝は二つ返事で飛んで往つた。そして仔細らしい顔つきで、病人の腹を診てゐたが、一寸小首を傾げて、

「お産後でございますか。」

と醫者らしい丁寧な言葉で訊いた。

徒士は變な顔をしたが、まさか醫者が自分を産婦と取違へもすまい。これはきつと自分の聞き違へに相違なからうと思つたので、「然うです。」と言つて軽く頷いてみせた。徒士はどんな醫者でもが病人が自分の診断通りに返事をして呉れるのを喜ぶものだといふ事をよく知つてゐた。

醫者はじつと脈を押へたまま、

「お産はいつ頃でございましたか。」

と訊いた。

病人は困つたらしく頭を掻いたが、たうとう泣出しさうな顔をした。

「先生。どうか御戯談を仰しやらないで下さい。私は疝氣を病んでるんですから。」

その瞬間、醫者は相手の顔を見て、蝦のやうに赧くなつた。

「いや。飛んだ粗忽を申しました。實は先刻御婦人の病氣を診て、つひそれが頭に残つてゐたものですから。」

かう言つて、二度三度お辭儀をした。頭には何も残つてゐないと見えて、輕さうに動いた。また一人、下總に宗仙といふ醫者があつた。其頃の曆學者として聞えた伊能忠敬の娘が病氣した時、聘ばれて毎日のやうに病室に入つて往つた。

男
の
お
産
或日の午過ぎ、例のやうに慌てて入つて來た。心安立に碌々挨拶もしないで、膝を進めたと思ふと、其處に居合はせた娘の伯父の手を取つた。伯父は密源といつて頭を圓めた僧侶であつた。

「成程、昨日よりはずつと快くなつた。もう案じる程の事はない。」

醫者が安心したやうに言ふので、密源はその手を相手の鼻先に衝きつけた。

「宗仙さん。これは拙僧わづしの腕かひなでござりまするぞ。」

「や、これはどうも。飛んだ粗忽を……。」

と言つて、宗仙は知らぬ世界へでも來たやうに、泳ぐやうな手附で眞實の病人を捜しにかかつたといふ事だ。

してみると、今の醫者が病人の手を間違はずに握るといふ事だけでも非常の進歩である。よしんば男の手に産後の脉が搏たうと、それはほんの些細な事で……。

音楽家の頭

パデレウスキイといへば、波蘭の聞えた音楽家だが、最近米國に渡つた時、ある日勃士敦の停車場で、汽車を待ち合せてゐた事があつた。音楽家はシヨパンの樂譜でも踏むやうな足つきをして、歩廊をあちこち徜徉してゐた。

十二三のちんぴら小僧が、物蔭から飛び出して、この音楽家の前に立つた。

「旦那。磨かせて頂きませうか。」

パデレウスキイは立停つて、黙つて小僧を見おろした。紛ふ方もない靴磨きで、橙のやうに小さな面は、靴墨で眞黒に汚れてゐた。

音楽家は洋袴ズボンの隠しから、銀貨を一つ取り出して、掌面の上に載せた。

「靴は磨かなくともいい。お前の顔を洗つておいでよ。さうするとこの銀貨をあげるから。」

その折、音楽家の靴はかなり汚れてゐたが、彼はその晩直に天國の階段を上るのでも無かつたし、米國の土を踏むには、夫で十分だと思つてゐたらしかつた。

「はい、はい。直ぐに洗つて來ますよ。」

小僧はさう言つたかと思ふと、直ぐに洗面所へ駆けつけて、土塗れの玉葱でも洗ふやうに、顔を水に突込んでごしごし洗ひ出した。

小僧は洗ひ立ての顔をして、パデレウスキイの前に歸つて來た。音楽家は「よし、よし。」と言つて、銀貨を小僧の濡れた掌面に載せてやつた。小僧は一寸それを頂いたが、直ぐにまた音楽家の掌面にかへした。

「旦那。銀貨はこの儘お前さんに上げるから、これで散髪をおしよ。」

パデレウスキイは驚いて額を撫でてみた。成程帽子の下から長い髪の毛がもちやもちや食み出してゐた。夫は音楽家が自慢の髪の毛だつた。

馬が悪い

むかし、矢野大膳といふ馬乗の名人が居た。ある時友達の許を訪ねようとして、馬に乗つて出掛けたものだ。晴れた美しい秋の日で、町には人間や赤蜻蛉が羽を伸して飛びまはつてゐた。

大膳は何を考へるともなく、馬の手綱を取つてゐた。馬は牝の事を考へてにやにやしてゐた。ふと氣が附くと、つひ眼の前を美しい女が歩いてゐた。

「いい女だな。どこの娘だらう。」

大膳はその一刹那に、自分が獨身者であるのを大層幸福に思った。——獨身といふものは結構なもので、どんな聖母とでも、どんな乞食とでも結婚する事が出来るものだ。

大膳は女の後姿に見惚れながら、じつと手綱を掻い繰つてゐたが、暫くして四邊を見ると、今通りかかつてゐるのは、つひぞ見も知らぬ町で、友達の家とは反對の方角だつた。

「はてな。何うしてこんな所へ出て來たらう。」

大膳は鞍の上で獨語を言つたが、その次ぎの瞬間に馬が勝手に女の後をつけてゐるのに氣がついた。馬は鞍の上の主人には頓着なく、ずんずん女の後を追つて往つた。

暫くして女は遊女町へ入つた。そしてある一軒の洒落たお茶屋に入つたので、初めて女が遊女である事が判つた。馬と主人とはお茶屋の門先に立つて、残り惜しさうに内を覗き込んでゐた。

馬が それから大膳は遊女買を始めた。そしてせつせと其の女の許に通ひつめたが、暫くすると金に詰まつて來た。

い 「困つたな。いい金の蔓は無いか知ら。」

大膳は思案に苦しんで、馬に相談してみたが、馬は何も言はないで首をふつた。大膳はやがて其の馬をも手離してしまつた。馬を賣つた金も十日とは残つてゐなかつた。

「切支丹へ入らう。さうすればいくらかの金になるさうだから。」

大膳は金が欲しさに切支丹に入つた。そして貰つた金で、こつそり神様に隠れて遊女屋通ひを續けてゐた。

そのうち切支丹が法度になつて、信徒は皆火炙にせられた。大膳もその數には漏れなかつた。

「俺が悪いのぢやない。馬が悪かつたのだ。」

大膳はかう言つて、炭團のやうになつて焼死んだ。

馬だの、女房だのが悪いと、男はよく酷い目に會ふものだ。

手品師と蕃山

手品といふものは、餘り澤山見ると下らなくなるが、一つ二つ見るのは面白いものだ。むかし、備前少將光政が、旅藝人の手品師が岡山の城下に來たのを召し出して、手品を見た事があつた。

一體大名や華族などといふものは、家老や家扶たちの手で、始終上手な手品を見せつけられてゐるもののだが、備前少將は案外眼の明るい大名だったので、用人達もこの人の前では、

「二二が六。」

と手品の算盤珠を弾いて見せる譯に往かなかつた。で、少將は一度手品といふものが見たくて堪らなかつたのだ。

手品師は恐る恐る御前へ出た。夏蜜柑のやうな痘痕面をした少將の後には、婦人のやうな熊澤蕃山や、津田左源太などが畏まつてゐたが、手品師の眼には顔の見さかひなどは少しもつかなかつた。大勢の顔が風呂敷包のやうに一かたまりになつて動いた。

手品師は小手調べに二つ三つ器用な手品を見せた。それから金魚釣といつて居合はせた小姓の懷中から、金魚を釣り出さうといふ自慢の藝に取りかかつた。

小姓は氣味を悪がつて、小さな襟を掻き合はせたりした。手品師はさつと釣針を投げて、勢よく小姓の襟先を掠めて、夫を引き上げたが、釣針の先には何もかかつて居なかつた。

手品師は慌てて、二度三度同じ事を繰り返したが、その都度手先が段々そそつかしくなるばかりで、金魚は少しも釣れなかつた。そして終ひには金魚の代りに小姓の前髪を釣り上げた。

小姓は鮎のやうに泳ぐ手附をした。夫を見て一座は聲を揚げて笑つた。

手品師は眞赤になつて疊の上に這ひ踞つた。額からは油汗がたらたらと流れた。

「これまで一度だつて仕損じた事のない手品なので御座りますが、今日はまた散々の不首尾で、お詫びの申上げやうも御座りません。」手品師は子供の手のひらでべそを掻く蟬のやうな聲をした。「私めの考へまするには、このお座敷には人並秀れた偉い御器量のお方が居らせられますので、夫でどうも手品が段取よく運ばないかのやうに存じられまする。」

備前少將はそれを聞くと、にやりと軽く笑つた。後の方では蕃山と左源太とが腹のなかで頷いたらしかつた。

手品師め。手品には失敗したが、巧い事を言つたもので、少將と蕃山と左源太とは、各自腹のなかでは、「その偉い器量人は多分乃公だな。」と思つたらしかつた。この人達にだつて自惚は相當にあつたものだ。金魚は釣れなかつたが、手品師は素晴らしい物を三つ釣り上げてゐる。

女の舌を

發明家のエディソンが、ある朝自分の實驗室で、何か藍色の薬料を乳鉢のなかで混ぜてゐる

とそこへ美しい令嬢がひよつくり訪ねて來た。令嬢はこの高名な發明家の實驗室を一目見て、何かの折の談話の種にしたかつたのだ。

エディソンは發明も好きだが、發明の次ぎには戯談も好きだつた。今自分の實驗室に入つて來た女の高慢ちきな顔を見ると、例の癖がむつくり頭を持ち上げて來た。

「お嬢さん。」と發明家は女に呼びかけた。「申し兼ねますが、一寸貴方のお舌を拜借出來ますまいか。私の舌はいろんな實驗ですつかり痺れつちまつて、皆目味かいちくが解らなくなつてるもんですからね。」

舌 若い令嬢は黙つて頷いてみせた。耳の遠いエディソンには、言葉をかけるよりも、頷いてみせた方が解りやすかつた。令嬢は舌の先でこの發明家の事業を輔ける事が出來たなら、こんな結構な事はないと思つてゐたのだ。

エディソンは小匙で乳鉢の薬料を一寸しやくつた。女は牛乳を欲しがる小猫のやうに、美しい舌の先を出して其の薬料を受取つた。

「どんな氣持がしますか。」

發明家は相手の顔を覗き込むやうにして訊いた。女は變に唇を歪めて、何も答へなかつた。

「すうつと好い氣持でせう。」

女は黙つて首を振つた。

「ひりひり舌を刺しはしませんか。」

「違ひます。」女はやつと返事をした。

「はてな。」發明家は態と小首をかしげた。「そんな筈は無いんだが。それぢや、どんな味がしますか。」

「まあ、どんなにか苦かつたでせう。」と女は口一杯煙草の脂を頬張つた藁のやうな口もとをしながら言つた。

「そんなに苦かつたですか。いや、どうも有難う。」

發明家は一寸頭を下げた。

「先生。それ一體何のお薬なんですの。」令嬢は無氣味さうに訊いた。

「解りませんな。夫を今私が研究中なんです。」發明家はまた乳鉢を手にしながら言つた。「だが、ある男などは、この薬で馬を百匹も殺したと言ひますよ。」

「まあ、そんなお薬……。」令嬢はキヤベツのやうに眞つ青になつてしまつた。エディソンは

夫を見て嬉しさうに笑つてゐた。

將軍の手紙

むかし、むかし、乃木大將と心易くしてゐた軍醫上りの男爵があつた。長年そこに勤めてゐる女中の一人が、ある日の事、男爵の前に兩手を突いて、

「旦那さま。一寸お願が御座います……。」

と結び立の頭を下げた。

男爵は読みさしの新聞を膝の上においた。

「何ぢや。宿下りなら奥にでも頼んだがよからう。」

「いえ。」と女中は言ひ難さうに一寸疊の上を見つめた。「甚だ申し兼ねますが、乃木さんのお手紙を二本ばかり戴かれませんか。」

「うむ。乃木の手紙が欲しいといふか。」

男爵は今更のやうに氣をつけて女中の顔を見た。圓々と肥えた顔に細い目が開いてゐるの
で、いつも臙肭臙のやうだとばかり思つてゐたが、今見ると何とかいつた女醫者によく肖てゐ
る。臙肭臙と女醫者と。大層な違ぢや。矢張り邸にゐるお蔭だなど男爵は思つた。

「乃木の手紙を欲しがるとは、近頃感心なことぢや。だが、何故また二本要るかの。」
女中はもう貰へる物だとばかり思ひ込んで、叮嚀に頭を下げた。

「はい、二本ございますと、帯が一本買へるさうに承りました。」

男爵は大きな掌面で鼻先を撫て下されたやうに、目をぱちくりさせた。よく見ると、女醫者
に肖てゐた女中の顔は、やつぱり臙肭臙に生寫しだつた。

「俺はな、乃木がそんなに名高くなると思はなかつたので、手紙は残して置かなかつたよ。」
男爵はかう言ひすて、次の室へ入つた。

「まあ、勿體ない。お手紙をみんな失くしちゃつたんだつて。」女中は臙肭臙のやうな細い眼
で、旦那の後姿を見送りながら惜しさうに眩いた。「ほんたうに手紙だけは残して置かなかつ
ちや。誰が腹を切るか知れたもんぢやないんだから。」

病氣必治法

詩人ゴオルドスミスは、文筆に従事する前に、醫者をしてゐた事があつた。何と言つてもゴ
オルドスミスの事だ。唯もう神様のお力に頼るより外には病人の持扱ひを知らなかつた程、結
構な醫者だつたに相違ない。

だが、醫者といふものは有難いもので、ゴオルドスミスが職業替をして詩人になつた後まで
も態々遠方から尋ねて来て、診察を頼むやうな病人も少くなかつた。そんな折にはお人好しの
詩人は、氣輕に起ち上つて、

「どれ、どれ。診て上げよう。どんな容態だな。」

と、仔細らしい手つきで脈を取つたものだ。ゴオルドスミスは自分が拙い藪醫者である事はよ
く知つてゐたが、それと同時に藪醫者でない醫者が、この世の中に住んで居ようとも思はなかつ
たから、別に遠慮する必要も無かつたのだ。

ある時、見すばらしい姿をした婦人が一人駆け込んで来た。暢氣な詩人は其折書肆から届いた幾らかの原稿料を、机の上にばら撒きながら、これで「天國」を購ふには、何ういふ方法を取つたが一番便利だらうかなどと、そんなたわいもない事を考へてゐた。

婦人は泣聲で鼻を詰まらせながら言つた。

「旦那様。亭主が長の病ひで、食物さへ咽喉を通らなくなつて居ります。可愛さうだと思召して一度診てやつて下さいませ。」

お人好しの詩人は、夫を聞くと狼狽へ出した。婦人を引張るやうにして、その家へ駆けつけてみると、病人は乾魚のやうに瘦せた身體を床の中に横へてゐた。詩人は脈を取つてみた。脈には大して悪い徴候も見えなかつた。で、よく譯を訊いてみると、食物が咽喉を通らないといふのは、實際通らないのではなく、通すべき食物が無いのだといふ事が判つた。詩人は念のためあんぐり口を開けさせてみた。咽喉はジョンソン博士が大辭典を小脇に抱へたまま、素通りが出来程廣く開いてゐた。

尊敬すべき醫者は、仔細らしい顔をして言つた。

「いや、よく判つた。これには良薬が家にあるから、後から取りに来るがいい。」

婦人はあとから薬を貰ひに、詩人のところへ出掛けて往つた。

「飲み方など詳しい事は、なかに書いてあるから。」詩人は、薬の小箱を渡してくれた。箱は薬にしては少し重過ぎるやうに思はれたが、しかし輕過ぎるよりは氣持がよかつた。婦人は家に歸つて、いそいそと箱を開けてみると、なかから轉がり出したのは、薬では無くて金貨であつた。包紙には詩人の手で、

「必要な時適宜分服の事。」

と書いてあつた。

醫者がほんたうに病人を治す積りなら、方法は幾らもあるものだ。

小粒金

松平伊豆守が、ある時將軍家光公の御前へ出るのに、白い徳利を一つ持參してゐた。目ざとい將軍家は直ちにそれに氣が注いたが、何喰はぬ顔をして伊豆の素振を見てゐた。すべて將軍

家とか、大家の旦那方とかいふものは、出入の者が白い徳利を持つてゐようと、短銃を持つてゐようと、成るべく見て見ぬ振をしてゐなければならぬ。もしか咎め立して、

「……………」

黙つてそれを目の前に突きつけられでもすると、それ相應の挨拶をする面倒があるから。

伊豆守は膝の上に白い徳利を抱き寄せて、將軍家の顔を見た。

「私、さる者から昨日古今無類の名酒を貰ひ受けましたから、上贖に供へようと存じまして、唯今これへ持参いたしました。」

將軍家の目は、初めて氣が注いだやうに白い徳利の上に光つた。

「古今無類といふか。珍らしいものぢやの。」

「御覽下さいませ。」伊豆守は、徳利を逆さまに疊の上にぶち撒けた。零れ出したのは灘の生一本と思ひの外、山吹色をした小粒金であつた。小粒金はちやらちやら音を立てて、疊の上を轉がった。

「ほほう、結構な名酒を貰つて、羨ましいことぢやの。」

將軍家は白い齒を見せてにやりと笑つた。

「しかし、夫には返禮をしなければなるまい。返禮には何をするつもりぢやの。」

「さあ、その返禮でござりますて。」伊豆守は態と呆けた顔をしてみせた。「返禮には伊豆ほとほと持餘して居ります。恐れながら、これは御上へお願ひ申し上げますより外に致し方も御座りますまい。」

將軍家は態と外つ方を向いた。

「乃公は知らぬぞ。名酒を貰つたのは其方ぢやからの。」

伊豆守は聲を立てて笑つた。

「それでは致方御座りません。名酒は其の者へ返し遣はすと致しませう。」

かう言つて、伊豆は掌を擴げて疊の上の小粒金を拾ひ集めた。小粒金は悪戯つ子のやうに、指の間を擦りぬけて轉げ廻つてゐたが、それでも終ひには素直に元の徳利に納まつた。白い徳利は急にまた酒の入つてゐるやうな顔をした。

結婚と奴隷

茶話全集

米國はキスコンシンの上院議員ラ・フォレット氏の愛嬢、フォラ・ラ・フォレット女史は、あちらでも新しい女として名高い人で、先年脚本作家のレオルデ・ミツデルトン氏と結婚したが、結婚後も良人の姓は名乗らないで、矢張り里方の娘のまんまで押通してゐる。

何故そんなにするのだと訊くと、女史は「眞理」や「婦人問題」を語るには、勿體ないやうな美しい唇から、

「何事も婦人の獨立のためです。」

と、きつぱり返事をする。

フォラ女史のお友達に、婦人運動に憂身を費してゐる或る貴婦人があつた。この婦人がある時民主黨議員クラウド・キチン氏の夫人を訪ねた事があつた。

女同士は夙くからの友達ではあつたが、亭主のキチン氏とその婦人とは、まだ一度も會つた

事が無かつた。

丁度お天氣の好い日だったので、キチン氏は薄汚い園藝服に破けた麥稈帽を被つて、せつせと玄關前の花壇で働いてゐた。

婦人は花壇の前で立停つた。凡ての女は、男が草搔をもつて、土塗れになつてゐるのを見るのが、好きて好きて溜らぬものらしい。婦人は一寸鼻眼鏡に手をやつて訊いた。

「爺や。御精が出るね。お前こちらのお宅に長らく御奉公してるの。」

「然うですな。もう相應かたりになりますな。」

「こちらはお給金は善いのかい。」

「いや。もうやつと食つて往けるだけでさ。一向詰りません。」

園藝服のキチン氏は、せつせと土を穿くりながら答へた。

婦人は一足前へ乗り出し、身を屈めるやうにして、

「ぢや、宅へ來たら何う。食べるだけの外に、お小遣も上げるよ。」

「有難う。」と麥稈帽は一寸お辭儀をした。「だが、一生涯こちらの奥様とこに、御厄介になる約束をしてしまつたもんですからね。」

「え、一生涯！ まあ、可憐さうに。」婦人は小皺の寄つた顔をくしゃくしゃさせた。「そんな約束が何處にあるもんかね。まるで奴隷だわね。」

「然うかも知れせんね。」とキチン氏は土塗れの手をして立ち上つた。「だが、私共では夫を結婚と申しますよ。奥さん。」

相阿彌と鸚哥

足利義政將軍は、色々結構な物を明から輸入した。織物、陶器、書物——何一つとして珍らしくないものはなかつたが、中に一番氣に入つたのは、一羽の鸚哥であつた。

義政の心には、明は夢想郷のやうに思はれた。鸚哥はそこからの秘密の使者でもあるやうに、將軍の耳に色々な言葉を囁いた。義政は籠に入れて側を離さず可愛がつた。

だが、鸚哥は女と同じやうに綺麗な羽を持つてゐた。女が飛ぶ事の出来る世の中に、鸚哥が飛んではならないといふ法はない。ある日近侍の小姓が餌を呉れようとする時、隙を覗つて籠

の外へ飛び出した。

義政は鳥を捜し出して連れて來ない限り、近侍の首は無いものと思へと言ひ渡した。其の折の將軍の顔は、悲しさと腹立しさとで、毀れた辨當箱のやうに歪んでゐた。

將軍家の近侍達は、手分けをして八方へ捜しに出た。そして洛中洛外を問はず、木立のある所は、どこにでも立ち寄つて枝葉を分けて詮索した。

其邊の軒下や繁みのなかからは、内證話や接吻に夢中になつてゐた雀や山鳩などが、慌てて眞赧な顔をして飛び出したが、肝腎の鸚哥は影さへ見せなかつた。

取り逃がした近侍は、最早覺悟を定めた體に見えた。そこへひよつくり顔を出したのは、將軍家お氣に入りの相阿彌だつた。

「何だつて皆鬱いだ顔をしてるんだな。こんな結構な日に。」

近侍は事情を話した。

相阿彌はさうかといつて、凝と考へ込んでゐたが、暫くすると、

「醍醐を捜したかな。那處そこに居るかも知れんぞ。」

と、何だか手懸りがありさうに言つた。

皆は急いで醍醐の山に駆け行つた。そしてあちこち捜してゐると、はたして鸚哥が見つかつた。鸚哥は廣い世間へ飛び出すには飛び出したものの、何處にも餘り好い事は轉がつてゐないので、また籠戀しくなつてゐた時だつたから、直に手挿にされて、もとの將軍家に連れ還へられた。女もかうして一度は世間に飛び出すが、いつかまた古巢に歸つてくるものだ。

義政は相阿彌を呼び出して、何ういふ理由で醍醐の山と見當をつけたかと訊いた。相阿彌の答は振つてゐた。

「宋元の繪を見ますと、鸚哥のとまる樹はいつも同じでございます。何と申しますのかは知りませんが、本朝では醍醐にあんな樹をたんと見受けまますから。」

だから、ふだんから言はない事ぢやない。畫家は無學では困る。そして鸚哥はまた畫家以上に物識で、ありふれた樹にとまらぬやうにして呉れなくちや困る。

喫煙家

亞米利加の富豪アンドリウ・カアネギイが、此頃ある宴會で話によると、氏が昨年英吉利に旅をして、とある停車場から倫敦行きの汽車に乗つた時の事、態々喫煙禁止の客車を選んで夫に乗る事にした。

汽車が次の停車場に着くと、肥つた男が一人乗込んで、カアネギイの向ひに腰を据えるなり、汚れた煙管を取り出してばつと火を點けた。

夫を見たカアネギイは注意した。「この客車では煙草は喫めませんよ。」

「宜しい。解つてます。喫みさしを一服やつてしまへば、夫で可いんでがさ。」

かう言つて肥つた男は、一服喫み盡してしまつたが、やがてまた安煙草を撮み出してすばすば吹かし出した。

「もし貴君……」カアネギイは少し聲を高くした。「私は御注意しましたね。この客車では煙

草は喫めないつて。夫にも頼着なくそんなにすばすばおやりになると、次の停車場で巡査にお引渡しするかも知れませんか。私は斯ういふ者です。」と言つて、彼は自分の名刺を出して見せた。

肥つた男は夫を受取つて、懐中にしまひ込んだ。そして相變らず煙を吹かしてゐた。

でも次の停車場へ来ると、その男は煙管を呷へた儘、碌すつば挨拶もせず、他の客車へ移つて往つた。カアネギイは巡査を喚んで一部始終を話し、不都合な今の男の名前だけでも可い、知らせて欲しいと頼んだ。

「どうも怪しからん話で。」

巡査は其の男の入つた客車の方へ、あたふたと駆けて往つたが、暫くすると、甚く恐縮した顔をして歸つて来た。そして二度三度カアネギイの前でお辭儀をした。

「いやはや。何と申上げたものか、實はその方を取調べようとすると、俺はかういふ者だと言つて、此の名刺を下さいました。御覽下さい、亞米利加の丸持長者アンドリウ・カアネギイさんですよ。」

流石のカアネギイも、開いた口が塞がらなかつた。名刺は先刻自分が相手に渡した許りのものであつた。

煙草は煙つばいものだが、夫でも煙草好きには、金持の知らない好い智慧が出る事がある。

出世の秘法

詩人バイロンが華やかな奔放な詩風で、一代の人心——とりわけ若い婦人の心を支配した頃は、歐羅巴の青年達は、みなバイロンのまねをして、頭の髪を長目にし、加之にバイロンのやうに態と跛をひいて歩いたものだ。

安永の老中、田沼主殿頭には妙な好みがあつた。それは銀製の牛を拵へて側に置き、閑さへあれば呪文を唱へて、その背を撫でてゐる事だつた。

その呪ひの故か、どうかは知らないが、主殿頭は身分不相應に出世して、紀州藩の小役人から老中にまでなつた。夫を噂に聞いた當時の人達は、

「那の出世は牛のお蔭に相違ない。何でも偉くならうと思つたら、牛の背を撫でてやる事だ。」といつて、牛を拵へて撫てる事が大流行に流行つた。

なかには主殿頭の向ふを張つて、大氣張りに銀の牛を拵へたのもあつたが、大抵は木で削り、土で焼いたのが多かつた。そんな輩に限つて、萬一都合よく出世したら、その曉に銀の牛を拵へても遅くはあるまいと思つてゐた。

お蔭で瀬戸物店や彫物師は、牛の註文で懷中を膨らませたのが少なくなつたが、それを撫廻した人達が、いくたりずばぬけて主殿頭のやうな出世をしたかは判らなかつた。

これはほんの内證事だが、茲にむかしから言ひ傳へた出世の秘方といふものを一寸お知らせする。それは自分の生れた年から數へて、ちやうど七つ目の干支を繪にかいて、いつも壁に懸けて置くと、立身出世疑ひないといふ事だ。むかしからよく七つ目の干支と言ふのは、かういふ理由があるからだ。

だが、七つ目の干支を使つてみても、一向立身しかなつたからと言つて、泣言だけは止して貰ひ度い。その時はその時で、また「哲學」といふ善いものがある。「哲學」は此の世で出世をした輩は、皆馬鹿だといふ事を教へてくれる學問である。

哲學者の寄附金

獨逸の厭世哲學者シヨペンハウエルが、ある時友達の一人と料理屋に上つた事があつた。この哲學者は、生きてゐるといふ事は、唯もう苦痛に過ぎないと言つてゐる癖に、人一倍養生はするし、傳染病が流行り出すと、誰よりも先きに住んでる町を逃げ出した程、自分の身體を大事にしたものだ。だから料理屋に上つて、贅澤な皿を註文したからといつて、別段咎め立などしないやうにして貰ひたい。

見ると、直ぐ側の卓子に、お洒落な青年士官が三四人居合せて、軍鶏のやうに胸を反らし、きいきいした聲で何か頻りとはしやぎ散らしてゐた。

厭世哲學者は夫を聞くと、額に痲筋をおつ立てて、苦り切つてゐた。友達は此の哲學者が平素から女と騒々しいのが大嫌ひなのを知つてゐるので、獨でやきもきして居たが、そんな事に氣を兼ねる程の青年士官では無かつた。哲學者は冷たい眼でじろじろ隣席の軍鶏を睨み睨み



してゐたが、何を思つてか、懷中から金貨を一つ取り出して、かちりと卓子の上に置いた。哲學者は言葉少なに、友達と向き合つた儘、幾皿かの料理を平げてしまふと、先刻卓子に置いた儘の金貨を取上げて、また懷中にしまひ込んでしまつた。夫を見た友達は理由を訊かないでは濟まされ無かつた。

「君、その金貨は何うしたんだね。先刻から訊かうと思つてたんだが、まさか呪ひぢやあるまいね。」

「呪ひぢやない。寄附金さ。」

哲學者はいつもの皮肉な調子で言つた。

「僕は今時の士官が、女と馬と昇級の事以外に、何でもいいから談話をするものがあつたら、喜んで此の金貨を慈善事業に寄附したいと思つてたんだがね……。」

と、またしてもじろりと佩刀を下げた軍鶏の方を見かへつた。
「ところが、奴さん達、御覽の通りの始末で、とんと僕を慈善家にする機會を與へて呉れなかつたよ。」

天神様の子供衆

一體地獄にはどれ程の人数が居る事だらう。——僧侶や、牧師が、人を罪人扱ひにするお説教を聴く度に、誰でもがこんな考へを起すものだが、それに就いて一六六六年頃ある獨逸人が詳しく書いた事があつた。獨逸人はむかしから地獄の事にはよく通じてゐた。

何でも其の説によると、地獄には其の頃人間が總べて四千八百六十六萬六千三百二十二人居た事になつてゐる。太古からその年代までの人数を數へ立てたら、随分な數に上るだらうが、その残りが皆天國に居るとすると、神様のお裁きも、かなり善い加減なものと言はなければならぬ。夫にしても其の獨逸人が、どんな方法で地獄の人口調査をやつたかは、其の女房すら知らなかつたといふ事だ。女房に知らさないで、何か知ら出来る亭主が居たら、それは偉い男で、この意味において件の獨逸人は英雄である。

むかし寶曆の頃、江戸に菅大助といふ書肆が居た。ひどい歴史好きで、自分でも書を著はし

だが、菅原道眞の傳記を書く段になつて、この人には二十四人も子供が居て、そのなかで名前が知れてゐるのは五人しか無いのを甚く氣苦勞に病んだものだ。

道眞にしても、世間の手前もあらうものを、二十四人とは少し産み過ぎたやうだ。この人は夙くから書をかいたり、詩を詠んだりして居たさうだが、外の方面にも相應早熟かなりだつたものに見える。大助は残りの十九人の名前を調べ出さなければ、天神様に濟まないとでも思つたものか、色色ばな書を涉獵だつてみた。だが、多くの大切な事を搜す場合と同じやうに、書には何一つ書いてなかつた。

大助はたうとう善い事を發明した。それは狐憑きを呼んで来て、神下しをかけて、一々名前を訊き出すといふ事だ。大助は狐憑きの言ふが儘に、ちやんと十九人の名前を書きとめたものだ。それを聞いた塙檢校は「人間に判らぬ事が狐に判らう筈がない。」と言つて、鼻の上に皺を寄せて笑つたさうだが、それは檢校が間違つてゐる。人間に判らぬ事は、神様や狐に聞くべきで、神様が名代の沈黙家であるからには、狐にでも聞かなければ仕方がない。唯狐がたわいのない嘘吐きであるのは、人間の拵へた古記録とおつつかつつである事さへ知つてゐれば、それだけいいのだ。

女優と監督

以前何かの折に、一寸引合に出した事のある米國の劇場監督チャアルス・フロオマンは、恐ろしいやかましやで、相手が誰であらうと、自分の指圖に従はないものは、手厳しく遣つ付けるので名高い男だ。

いつだつたかも、ある劇の稽古をつけてゐる時、女優の一人に、科しよが何うしてもフロオマンの氣に入らないのがあつた。それはパトリック・カムベル夫人といふ女優で、鶏のやうな癩高い調子を持つ女だつた。

フロオマンは鼻を擡めてカムベル夫人を見た。夫人は鶏のやうに胸を反らして舞臺を歩き廻つてゐた。

「カムベルさん。何といふんです、貴女の藝は。てんでお話にならないぢやありませんか。」フロオマンは情なささうに言つた。

夫人は其の折、役に同化した積りで、すっかり好い氣持になつてゐたので、フロオマンの批評を聞くと、眞蒼になつてぶるぶると胸を顫はせた。暫くは舞臺の端に立つて、鉛筆のやうに眞直になつてゐたが、急に靴音を蹴立ててフロオマンの前へ出て來た。

「何だと仰有るんです。フロオマンさん。てんてお話にならないんですつて、私の藝が。ちよいと申し上げて置きますが、私かう見えても藝術家なんてすからね。」

夫人は眼一杯に涙ぐんで、きいきいした聲で我鳴り立てた。

フロオマンは苦り切つた顔をして外方そっぽうを向いてゐたが、夫人の聲が途切れると、だしぬけに牛のやうな聲を張り上げた。

「夫人、貴女が藝術家ですつて。これは初めて伺ひました。結構な内職をお持ちですね。世間へは精々内證にして置きませうね。」

夫人は息が塞まつたやうな顔をして、その儘舞臺を駆け下りてしまつた。

華盛頓は死んでゐる

亞米利加の國會議員に、タルボット氏といふ男が居る。何か飛んでもない失敗でもしなれば、滅多に他人に名前を知られさうにもない男だが、幸福な事には一つ失敗譚を持つてゐる。

この男が、先日ヴァージニアのヴァノンが岡に住んでゐる一人の友達を訪ねようとして、馬車旅行を企てた。ヴァノンが岡といへば、誰もが知つてゐる通り、亞米利加の國祖ワシントンが長く住んでゐたところで、タルボット氏の友達は、何でも其の近くに家を構へてゐるといふ事だつた。

すべて名所舊蹟の近くに住居を構へるといふ事は、自分にとつては兎も角も、訪ねて來るお客達にとつては、分り易くて便利なものだが、生憎タルボット氏は、從來一度も國祖の舊棲を訪ねた事が無いので、一寸方角が立たなかつた。さうかといつて自分の行く先を馬に訊く事も出来なかつた。大抵の場合馬は主人よりも伶俐なものだが、タルボット氏の馬は、多くの議員

達と同じやうに餘り物を識らなかつた。

ところが、都合よく學校歸りの子供が一人そこを通りかかつた。タルボット氏は車の上から訊いた。

「ちよいと坊や。お前ワシントンのお家を知つてるかい。」

「知つてるよ。」子供は圓まつちい顔をあげた。

「ぢや、叔父さんに教へておくれ。」

議員はほつとしたやうな顔をした。

子供は自分の今来た方角を指さした。

「これを眞直にお往きよ。さうすると自然ひたすらにワシントンのお家の前へ出ら。」

「有難う。坊やは善い兒だね。」とタルボット氏は資本のかからない愛嬌笑ひを見せて、馬に一鞭あてた。馬は急にワシントンとは昔馴染だつたやうな顔をして、勢よく駆け出さうとした。

「叔父さん。」子供は後を見送りながら呼んだ。「そんなに急がないで、緩くりお往きよ。ワシントンはもう死んぢやつてるんだよ。」

子供といふものは、正直な事をいふものだ。

元帥の諧謔

元帥ジョツフルが、佛蘭西の軍事委員として、幕僚を引連れてつひ先日米國へ渡つた事があつた。その折夥しい歡迎人の中から、生粹の米國生れと思はれる一人の貴婦人が、つかつかと一行の前に出て來た。

男がたんと並んでゐる場合に、女が先づ言葉を掛けるのは、そのなかで一番若い男と極つてゐるものだ。貴婦人は一行のなかから若い將校を捜し出して言葉をかけた。

「つかないことを訊くやうですが、戦争では貴方も獨逸人を幾人かお殺しになつて？」

「はい。五人ばかり遣つ付けましたよ。」若い佛蘭西の將校は、米國婦人のだしぬけの質問に幾らか氣味を悪がりながらも、自慢さうに言つた。

貴婦人はそれを聴くと、飛びつくやうにして、ひしと男の右の手を握つた。若い將校の五本

の指は暖い女の掌面のなかで小鳥のやうに顫へてゐた。女は嬉しさうに訊いた。

「ちよいと、このお手なの、獨逸人を殺したと仰有るのは。」

「まあ、そんなものでせう。」と若い將校はどぎどぎする胸を押し鎮めながら、態と氣取つた物の言ひやうを試みたが、氣の早い米國の婦人はそんな事は少しも耳にとめないらしく、いきなり男の右の手を持ち揚げたかと思ふと、夫を自分の唇に當てて、幾度か熱い接吻をした。

「まあ、名譽なお手なこと……。」暫くして婦人は手を離しながら言つた。

若い將校は、嬉しさに取り逆せながら、今一つの左手では百人も獨逸人を殺したらしい顔をして、手先をもじもじさせてゐた。

側に立つてゐたのは、他ならぬジョツフル元帥だつた。元帥は激しい獨逸軍の攻勢にも、びくともしなかつたあの落着いた態度で、この場の容子をじろじろ見てゐたが、貴婦人が引揚げてしまふと、若い將校の方へのつそりと向き直つた。

「馬鹿め。あんなに接吻までして呉れようといふんだ。何だつて私は獨逸人を此の口で噛み殺しましたと言はなかつたんだ。」

ラムの祈禱

佛教信者は食事をする時、先づ飯を一箸とつて佛に供へる事を忘れない。耶蘇教信者はまた食卓につくと、屹度感謝のお祈禱をする。どちらもほんたうに結構な心掛だが、かう諸式が高くなつては、多くの人の食卓は、これが神様の下された物だらうかと、怪しまれるやうに見窄らしくなつて来る。神様にしても、こんな事位で三度々々さうお禮を言はれては、何だか面當がましく聞えない事もなからう。

シエエキスピア物語で日本人にもよく知られてゐるチャアルズ・ラムが、ある時多くの知合と一緒に、誰かの晚餐に饗された事があつた。皆が食卓につくと、主人役は、

「ラムさん。」

と言つて、多くのお客のなかからシエエキスピア物語の著者呼んだ。

「恐れ入りますが、食前のお祈りを貴方にお願ひしたいものですな。」

ラムはたつた今其の晩のお禮を主人に言つたばかりの所だつた。この上神様にもお禮を言はなければならぬものなら、夫には牧師といふ恰好な人があつた。牧師といふものは、平素から自分のいふ事だつたら、どんな不機嫌な折でも（よしんば齧齒が痛んで居らうと）神様はきつとお聞き入れ下さると言ひ言ひしてゐるものだ。

「牧師さんはいらつしやいませんか。」

ラムは多くのお客のなかから牧師を捜した。牧師は先刻まで其邊に居合せたが、神様に内證話でも出来たかして、一寸次の室に起つた所だつた。

「牧師さんは、あちらで御用をしていらつしやるやうですから、矢張貴方にお願ひませう。」
主人役はかういつて催促した。

「それぢや、私が致しませう。」ラムは頭を下げた。「神様。今晚はどうも有り難うございませう。兎も角もお禮を申しておきます。」

生 き 髯

むかし、中國邊のある城下に、大層髯の立派な町人が住んでゐた。晝は店先に坐つて町を通る人達に、自慢の髯を見せつけるのを何よりの道樂とし、夜になると髯の夢ばかり見てゐた。

さういつた風に、餘り髯を大事にし過ぎるので、自然仕事の方は疎かになつて、店は寂びれる一方だつた。

髯 「かう不景氣ぢや迎も行りきれない。」

その男は長い髯を抜いて、溜息を吐くばかりだつた。

その殿様は大の能樂好きで、恰度其の頃面師めんしにいひつけて、能の面を拵へさせてゐた。

「面に植えつけるのに、誰か恰好な髯を持つてないものか知ら。」

殿様はかう言つて面師に相談をした。面師はそのとき例の町人の事を思ひ出したので、那の髯だつたら申分があるまいと言つた。

殿様は家來に面師を連れさせて、町人の許へ示談にやつた。

「殿様の仰せぢや。お前の口髯が賣つて貰ひたい。代りに三十兩遣はすから……。」

「三十兩。」町人は胸で算盤を弾いた。逼塞した身には、三十兩といふ纏まつた金は有難かつた。だが、錢金には替へ難いと思つて來た自慢の髯である。町人は自分を納得させるのに、何よりも好い辭柄を見つけた。

「殿様の仰せと承りますれば、惜しい髯ではござりますが、御用にお立て申しませう。」

町人はかう言つて、剃刀を取り出して自分の髯を剃り落さうとした。

「待たつしやれ。」と面師はびつくりして押し止めた。「剃り落したのでは、髯が死髯になつてしまひまする。」

町人は剃刀を持つた儘、魚のやうな愚な眼つきをしてゐた。面師は包みからお誂への面を取り出した。そして

「かうしてお譲り受け申すのぢや。」

と言つて、一本一本引っこ抜いて面に植えつけた。

町人は髯を抜かれる度に、齒を食ひしばつて泣顔をした。そして自分で自分を納得させる爲

に、

「何事も殿様の仰せでござるから……。」

と言つて、大きな掌面で額の汗を拭いた。

作　　り　　髯

赤穂の儒者赤松滄洲は、學者には惜しい程堂々たる顔をしてゐた。なかにも髯は素晴しく立派で、自分にも大分それが自慢らしく、

「どうぢや、日本一の髯ぢやぞ。」

と、他の顔さへ見ると、長い髯をしごいてみせたものだ。

ある日の暮れ方、滄洲がいつものやうに縁端で髯を抜いていい氣持になつてゐると、そこへ恰幅の立派な爺さんが訪ねて來た。ついで見知らぬ顔だが、その髯を見ると、流石の滄洲も吃驚した。長さは三尺にも餘らう、銀のやうな白さで、抜くと音がしさうに思はれた。

滄洲はさつと顔色を變へた。爺さんはそれを尻目にかけて座敷に上つたが、初對面の挨拶が濟むか濟まないうちに、もう聲を張り上げて色々世間話を始めた。時々熊の膽のやうに苦い皮肉を交へながら。

滄洲はそれが癪にさはつてならなかつた。何とかして高飛車に出てやらうと、幾度か下腹に力を入れてみたが、その都度爺さんが自慢さうに扱いてゐる銀のやうな長い髻が目につくので、たわいもない詰らぬ事を言つてしまつて、吾ながらはつとした。

爺さんはいい加減に氣焰を揚げて座を起つた。

「何しろ立派な髻だ。」

滄洲は腹のなかで髻のこのみを思ひながら、勢のない顔をして玄關まで見送りに起つた。沓脱に立つた爺さんは、一寸頃に手をやつたかと思ふと、さつと髻を脱して片手に持つた。そして肩をそびやかして歸つて往つた。

「ぢや、作り髻だつたのか。」

滄洲は覺えず口走つた。そして今迄忘れてゐた自分の髻を握つて、掃子のやうに揮つてみたが、もう間に合はなかつた。

牡蠣を食ふ馬

ベンヂヤミン・フランクリンが、ある冬馬に騎つて田舎に旅行をした事があつた。雪の多い頃で夕方田舎の旅籠屋に着いた頃には、馬も人も砂糖の塊のやうに眞白になつてゐた。

フランクリンは馬を小舎に繋いで、入口に立つて外套の雪を叩き落した。

「おう寒い、寒い。靈魂までがすつかり凍つてしまひさうだ。」

獨語を言ひ言ひうちに入つて來た。見ると、燠爐の周圍には先客がどつさり寄つて集つて、火いきれに火照つた眞赤な顔をして、何かやがや話をしてゐた。そしてフランクリンが寒さに顫へてゐるのを見ても、誰一人席を譲つて呉れる者も無かつた。

フランクリンは氣まづさうな顔をして、隅つこの椅子に腰を下した。そして亭主を呼んだ。亭主は玉葱の匂ひがぶんぶんする掌面を揉みながら入つて來た。

「へい、入らつしやいませ。何か御用でございますか。」

「うむ。馬を小舎に繋いで置いたから、急いで牡蠣を一升やつてくれ。」フランクリンはかう言つて、龜縮かぢかんだ掌面てのひらで額かぶたを撫なでてまはした。「穀このまんまで可いよ。穀は馬が自分で取つて食べるからね。」

「馬の飼葉に牡蠣をやつてくれ。」——それを聞いたお客達は、今迄話してゐた世間話を止めて、一齊いっせいに此方を振り向いた。そして亭主が臺所から牡蠣の一升がところをもつて、馬小舎に出掛けたのを見ると、

「一體どんな馬だらう、牡蠣を食ふつてのは。」

と、好奇心に充ちた眼を光らせながら、どやどやと後から蹠ふみいて往つた。

フランクリンは、隅すみつこの椅子を立つて燧爐たいろの側へ往つた。そして好い氣持に手足を擴げて、靈魂が息を吹きかへすまで暖まつた。

フランクリンめ。平素から人間は正直でなくつちやならぬと言ひながら、寒いといひこんな嘘うそを平氣で言つてのけてゐる。だが、眞實まことのところ嘘一つ吐けないやうな碌ろくでなしでは、迎も正直者にはなりかねる。

尻 と 腹

土筆が二本立ちて頭を擡げるやうに、偉い主人は屹度秀れた家來を連れて出るものなのだ。熊本の名君細川靈感公の家來に、堀勝名が居たのも丁度それである。

それまで熊本には罪人を取扱ふのに、死刑と追放と、この二つしか無かつたのを、勝名の考へで笞刑と徒刑とがその外に設けられる事になつた。笞刑は言ふ迄もなく、尻しつつ邊を叩くので、それに用ゐられる笞しが新しくとのへられた。

だが、勝名はその笞で罪人の尻しつつ邊を幾つ叩いていいものか見當がつかなくかつた。その時分熊本の城下には、叩たたしつけていい尻はどつさり有つたかも知れないが、他人の身體では肝腎かんじんの痛さは判らなかつた。

そこで勝名は自分の尻を叩く事に定めた。ある家來の子供にしこたま御馳走をふるまつて、上機嫌になつた時、大きな尻を捲つて其の鼻先に突きつけた。

「さあ、其の管で思ひきり叩しつけてくれ。」

子供は狸をとつちめるやうな積りで、強く尻つ邊を叩きつけた。勝名は顔を顰めながら、

「さ、も一つ氣張つて叩いた……。」

と言つて、肌が紫色に脹れ上るまで管を續けさせたといふ事だ。

流石は勝名で、思ひ付が面白いが、然し眞實の事をいふと、他人の尻で濟む事なら、自分の尻は成るべく叩かぬ方がよい。これを一番よく知つてゐるのは發明家のエヂソンであつた。

エヂソンは今日まで色々の事を發明したが、其の才能は早くも子供の時から現れて、丁度七歳の頃、學校教師から袋に瓦斯を盛ると風船が出来ると聞いて、早速それを試してみようと思つた。

エヂソンが風船の材料として選んだのは、八歳になる自分の友達だつた。この小發明家は友達に沸騰散をしこたま飲ませておいて、後からお冷水をぐつと一杯煽飲らせた。

エヂソンの考へでは、かうすれば友達に瓦斯が一杯詰まつて、風船のやうに地面からすつと持ち揚るに相違ないと思つてゐたのだ。——が、いつ迄待つても、友達を持ち揚らなかつた。

「こんな管ぢや無いんだがなあ。」
と小發明家は失望した顔をした。

だが、お蔭で友達に腹のなかは雷のやうに鳴り出したに相違なかつた。得て無益な事ばかり書きたがる歴史家は、この小さな腹の出来事については、何一つ書き残してゐない。

魚の骨

京都の智恩寺といへば、斷はる迄もなく淨土宗の大本山である。その三十九代目の住職に、萬靈上人といふ、大津生れの名高い僧侶さんが居た。何でも三十八年の間引續いて住職を勤め、延寶八年とかに九十二で亡くなつたといふから、随分達者な僧侶さんだつたに相違ない。

この僧侶さんが亡くなる五六年前の事だつた。ある日寺男を指圖して庫裏の床下を掃除させたものだ。どこの家でも床下には色々の秘密がある。金の茶釜を掘り出したり、野良猫の隠し

兒を見つけたりするのは大抵が床下で、もしか床下に何一つ落ちてないやうな家があつたなら、その祖先は落す程の物を持合はさなかつたので、こんな氣の毒な事はない筈だ。

在方ざいかたの床下にあるものが、寺方の床下に無いといふ法は無い。智恩寺の床下からは、つひこなひだ食べ荒したばかりの魚の骨がどつさり出た。

「てつきり納所坊主のしだらに相違ない。お上人様のお目に懸けなくつちや。」

寺男は其の魚の骨を拾ひ集めて、上人の居間に入つて往つた。

上人は夫を見て變に顔を歪めてゐたが、暫くすると、

「どうも、今時の若い奴は根氣が弱くていかな。」

と獨語のやうに言つた。

「眞實でございますよ。お坊さんの癖に、こんな物まで啄つくなんて。お上人様方のお若い時分には、ほんたうに不味い物ばかり召しあがつてたぢやありませんか。」

寺男がぶつぶつ呟くのを、上人は掌面で押へつけるやうな眞似をした。

「いやいや。そんな積りで言つたのぢやない。わしの若い時には、骨など食べ残すやうな事はしなかつたと言つたまでぢや。」

三 十 六 計

むかし元祿の頃に、大野秀和といふ俳人が居た。同じ仲間の寶井其角が自分の事を悪し様に噂をしてゐるといふ事を聞いて、大層腹を立てた。

「其角の奴め。一度ひどい目に會はして呉れなくつちや。」

秀和は俳諧こそ其角よりは下手だったが、以前が侍だつただけに、腕つ節はずつと太いの持ち合せてゐた。

其角は秀和が大層腹立つてゐる噂を聞いて、成るべく出會はぬやうに氣をつけてゐたが、ある日の事間が悪く兩國橋の上でばつたりと行き合つた。講釋師の話によると、其角が煤竹賣の大高源吾に出會つたのも、矢張り兩國橋の上だつたといふ事だから、其角といふ男は、閑さへあれば兩國橋の上をうろろしてゐたものと見える。

眼ざとい秀和は其角の姿を見通さなかつた。

「おい、其角。お前は何ださうだね。近頃方々で乃公の事を悪し様に言ひ觸らして歩くさうだが、夫は眞實だらうね。」

秀和の言葉は初めから喧嘩腰だった。

「眞實だよ。眞實だつたら何うするね。」

其角は喧嘩を買つて出た。

「果し合をする迄さ。」秀和は刀の柄に手を掛けて、二足三足詰め寄つた。「そんな噂を觸れ歩くからには、お前にも覺悟があるだらうから、さあ勝負をせい。」

「無論勝負をする。」其角はきつぱりと言ひ放つた。「乃公も男だ。いつでも相手になつてやるが、暫くの間待つてくれ。支度をしなくちやならんからな。」

其角はかう言つて、ぼつぼつ裾を端折り、雪駄を脱いで帯に挿んだかと思ふと、

「さあ来い……。」

と言つて、その儘後をも見ずに、一散に駆け出してしまつた。

長 い 紐

女といふものは、何によらず長過ぎる物が好きだ。むかし、或る詩人は友達にやる手紙に、

「今日は心が忙しいから、不本意ながら長い手紙を書く。」

と斷つて、手紙の長いのを恥ぢたものだが、女にそんな氣の利いたことは解らない。女は手紙の文句が長くさへあれば、相手の男を親切者だと思ひとつてしまふ。

白河樂翁公が老中を勤めてゐた頃、大奥の女中仲間に煙草盆に緋の紐をつける事が流行つた。女の好みだけに紐は煙草盆をぐつと差しあげても、まだ疊の上を曳きずる程長かつた。

樂翁公はそれが氣になつて溜らなかつた。ある日の事、老女の一人を呼び寄せた。老女は狐のやうに長い尻尾を持つてゐるさうな女だった。

「ほかでもないが、あの煙草盆の紐だね。」樂翁公は言つた。「あんな物をぶら下げてゐたころで、何の役に立つといふぢやなし、いつそ廢めたらどんなものかね。」

老女は石のやうに冷さうな顔をあげた。

「これはまた以ての外のお言葉かと存じます。御老中様には御存じないかも知りませぬが、あの紐と申しますのは、徳川のお家の長いのを壽ことばくために、長目に致してございますので、唯今のお言葉を伺ひますと、まるでお家が早く滅びましても……。」

「もう可い。解つた、解つた。」
樂翁公は顔を顰めて手をふつた。長い物好きな女の哲學には、流石の政治家も手を引つ込めてしまつた。

郭 公

むかし連歌師の紹巴が、松島を見に仙臺へ下つた事があつた。仙臺のお城では、目つかちの政宗公が夏の日の長いのに焦れて、獨りて糊精を起してゐるところであつた。

ある日の事、政宗公は家老の片倉小十郎を呼んで何か打合せをした。

その翌日、紹巴は御城内へ呼出されて殿様にお目にかかつた。政宗は氣難しい顔を強て捻ぢ曲げるやうにして、一寸笑つてみせた。

「紹巴か。よく參つて呉れたの。徒然の折ぢや。今日は連歌の話でもして呉りやれ。」

時が來ると、田螺も鳴く事を知つてゐる連歌師は、目つかちの殿様が歌を詠むといつても、格別不思議には思はなかつた。それに歌詠みだの、俳諧師だのといふ輩は、人殺しの口からでもない、相手が自分と同じ風流人である事を聞くのを、何よりも嬉しく思つてゐるものなのだ。

公 ちやうど時鳥の啼く頃で、庭には青葉がこんもりと繁つてゐた。政宗はお産でもするやうに、蟹のやうな顔をしかめてうんうんと唸つてゐたが、暫くすると、

「啼け、聞かう、身が領分のほととぎす。」
と詠んで、得意さうに書きつけた。

脇は片倉小十郎がつける事になつた。小十郎は兩手を拱んで考へ込んだ。身體のどこかを時鳥が矢のやうに飛んでゐるやうに思つたが、どうしてもその尻尾を捉へる事が出来なかつた。で、やつとこゝとして、

「啼かずば黙つて行け、ほととぎす。」
とつけて、紹巴の方へ廻して来た。

紹巴は發句から読み下してみると、殿様も家老も一羽づつ「ほととぎす」を飛ばしてゐるのには一寸驚いた。儘よ、もう一羽飛ばしてやれといふ氣になつて、

「何うなりと御意にしたがへ、ほととぎす。」

とつけて、何喰はぬ顔で政宗の方へ押しかへした。

殿様と家老と連歌師と、各自の境遇が思はれるやうな、三人三様の詠み風は面白かつたが、夫よりも面白いのは、その日に限つて時鳥が啼かなかつた事だ。もつと正直にいふと、時鳥が居なかつた事である。

天文學者

サア・ロバート・ポオルといへば、愛蘭生れの名高い天文學者で、劍橋大學でその方の講座

を受持つてゐる先生だが、幾ら天文學者だからといつて、木星から高い生活費を受取る譯にも往かないので、晝飯は精々手輕なところで済ませる事に決めてゐる。

ある時、久し振に舊い友達が訪ねて来たので、天文學者は滅多に往きつけない土地一番の料理屋に連立つて往つた。そして初めから終ひまで彗星の談話をしながら、肉汁を飲んだり、ピフテキを嚙つたりした。すべて學者といふものは、自分の専門の談話をしなければ、どんな料理を食べても、夫を美味いと思ふ事の出来ないものなのだ。

料理が濟むと、主婦は勘定書を持ち出した。天文學者はじつと其のメ高を見てゐたが、暫くすると望遠鏡を覗く折のやうに、變な眼つきをして主婦を見返つた。

「主婦さん、僕はここで一寸天文學の講釋をするがね。凡て斯の世界にある物は、二千五百万年経つと、また元々通りに還つて來るといふ事になつてゐる。してみると、僕も二千五百万年後には、矢張今のやうにお前さんの店で午飯を食つてゐる筈なのだ。ところで物は相談だが、この勘定をそれまで掛^かにして置いては呉れまいかね。」

「ええ、ええ、よござんすとも。」と主婦は愛想笑ひをしながら言つた。「忘れもしません。ちやうど今から二千五百万年以前にも、旦那は今日のやうに、手前どもの店でお午飯を召し食つ

て下さいましたが、其の折のお勘定が唯今戴けますなら、今日のはこの次ぎまでお待ち致しませう。」

天文學者は呆氣に取られて、笑ひながら錢入を取り出して勘定を拂つた。成程錢入を見ると、二千五百萬年も前から持ち古して來たらしい、手垢のにじんだものであつた。

筍 問 答

攝津の蘆屋に老齡の夫婦者が住んでゐる。神戸に居る息子の仕送りで、氣樂に日を送つてゐるが、こなひだからふとした病氣で媼さんが床に就いた。

「お爺さん。わたい貴方あなたを見送つてから死ぬのが順當やとそない思うてましたんやけどな……」。

媼さんは枕もとに坐つてゐる爺さんの手を取つて泣いた。手は何方も皺くちやだつた。「もう迎もあきまへんよつて、お先へ遣つて貰ひまつさ。」

爺さんは水涕と一緒に涙を啜り込んだ。涙も水涕も淡水まづのやうに味が無かつた。

「そない短氣な事言はんと、矢張わしを見送つてからにしといてえな。」

爺さんはやつとこれだけの事を言つた。

媼さんは頭を掉つた。智慧の持合せの少かつたのを、六十年この方便ひ減して來たので、頭の中では空塵を振るやうな音がした。

「あきまへん。迎もあきまへんよつて、お先へ往かしとくなはれや。そしてお爺さんは後からゆつくりおいなはれ。」

一しきり病人の咳きあげるのを、爺さんは後方から背を撫でてやつたりした。

「そない言はんと、せめて秋まで延ばしなはらんかいな。そのうち千日へでも往つて、おもしろい奇術を見てからにでもしたら何うや。」

爺さんは自分が何よりも手品が好きだつたので、お名残に媼さんと一緒にそれが見たかつたのだ。

媼さんは手をふつた。

「そない言うとくんはるのは嬉しうおますけど、お爺さん。私やつぱり往きまつさ。」

まるで他人に立聴でもされるのを氣遣ふやうに、干からびた口を爺さんの耳へ持つて往つた。

「この節は筈の出盛りやよつて、價が廉うおまつしやろ。お供養しなはるのに安上りに出来まんながな。」

「成程筈が廉い。それもそやなあ。」爺さんはじつと胸算用をするらしかつたが、考へてみると、筈よりも矢張媼さんの生命の方が高かつた。

「いやいや、やつぱり秋まで延ばしなはれ。」

「筈が廉いから今のうちに死にたい。」——儉約な商人の媼さんを、これ程よく現してゐる言葉はまたと有るものではない。それもその筈さ。媼さんといふ媼さんは、若い頃、

「絹物が廉くなつた。娘を嫁けるのは今のうちだ。」

と言つて、年齢頃には頓着なく、衣裳の安いのを標準に嫁けられた大阪女だからである。

審判の日

最後審判の日——といふと、耶蘇教では一番やかましい日で、これまで懶けてばかりゐた神様が、むつくり起き上つて、區裁判所の判事のやうな氣難しい顔をして、人間の裁判をする日なのだ。その日取はもうちやんと定つてゐて、教會の牧師のところまでは内々知らせて來てゐるらしいが、牧師の考へでは、夫を發表してしまふと、一度に善人が殖えるので、其前日までは知らぬ顔で伏せて置く積りらしい。何故といつて一度に善人が殖えると、牧師は何よりも好きな説教が出来なくなるのだから。

アアギン・コツプといへば、米國で聞えた記者だが、この男がある日教會へ往くと、牧師は例の「最後審判の日」といふ演題で長つたらしい説教をしてゐた。牧師は聖書の文句を引いて、この日の朝喇叭が高く鳴ると、有らゆる國の有らゆる時代の人間が、皆神の玉座の前に引き出されて、現世で仕て來た行爲について、厳しい裁きを受けなければならぬ筈だと説いた。

説教が済むと、聴衆の一人が立ち上つて牧師に訊いた。
 「先生。その日になると、人間残らずが、神様の前に引張り出されるとお言ひになりましたが、それはほんたうなんでしょうか。」

「然うですとも。」と牧師は判りきつた事のやうに言つた。

「それぢや、カインとアベルも其處に居ますね。」

「無論です。」

「ダビデとゴライアス。——あの二人も居ませうね。」

「居ませうとも。聖書にちやんと書いてありますよ。」牧師は女のやうな繊細な手で、革表紙の聖書をとんと叩いた。

相手の男は面白くて堪らぬやうに、にこにこしながら問を續けた。

「クロムウエルとチャアルス一世。——あの二人も居るでせうね。」

「居るでせうとも。確に居る筈です。」

「ナポレオンとウエリントンも一緒に居る筈です。」

「居る筈です。多分打揃つて神様の前へ引き出されるでせう。」

「面白いぞ。」其の男は自分が教會の中に居るのを忘れたやうに、大聲を揚げて喜んだ。「そんな輩がうんと居るんだもの、僕等の順番にはなかなか廻つて來ないや。」

食 べ 方

藤田東湖は貧乏だったから、酒の好いのが何よりも好物であつた。(内證で言つておくが、すべて富豪といふものは、貧乏人とは反對に、酒のよくないのを好くものなのだ。)で、その良い酒を飲みたいばかりに、頼まれると、蕎麥屋の看板だの石塔だのを平氣で書いた。書の相場は酒を標準に、一本一升といふ事に極めてゐた。

東湖は酒徳利を座敷の本箱の中へこつそり忍ばせておいて、箱の蓋には生眞面目に李白集と書いておいた。實際李白集があつたら、質に入れて酒に替へ兼ねない程の男だつた。

酒の肴には、やつこ豆腐か松魚の刺身があつたら、猫のやうにころころ咽喉を鳴らす事が出來た。水戸には未だに東湖の模倣者も少くない事だから、然ういふ人達にとつて、東湖が鱻

が好きだと言はないで、やつこ豆腐で辛抱したのは、どれだけ幸福だったかも知れない。これにつけても追隨者を成るべくどつさりもちたいものは、食物も精々手輕なところを選ばねばならない事になる。

實をいふと、東湖はやつこ豆腐よりも、まだ鯉の刺身の方が好きだった。好きだけに夫を食べるのに、自分獨得の方法を發明してゐた。それは一つづつ箸で摘まむ代りに、皿を掌面に載せて猫のやうに舌の先でべろべろ舐め込んでしまふといふ藝當である。

京都大學のS博士は、密柑を食べるのに、人と異つた食べ方をする。夫は指先で皮を剥かないで、密柑を掌面に載せておいて、前齒でそれに噛りつく。そして出來た齒痕に指を突込んでそろそろ剥いて行くといふ遣り方である。

人はそれぞれ自分の哲學を持つてゐる。自分の食べ方が他人のと異つてゐるといつても、別段顔を赧うするには當るまい。

氣 轉

ビスマルクが或時仲善しの友達と連立つて、獵に出た事があつた。すると、何うした機みか、友達は足を踏み滑らして沼地に陥つた。

友達は慌ててビスマルクを呼んだ。

「君、願ひだから僕を捉まへて呉れ。然もないと僕は沼地に吸ひ込まれてしまふ。」

ビスマルクは大變な事になつたと思つたが、強て平氣な顔をしてゐた。

「馬鹿を言ふない。僕が其處へ飛び込んで見ろ。一緒に吸ひ込まれてしまふばかりぢやないか。もうかうなつちや、迎も助かりつこは無い。君がいつ迄も苦しんでるのを見るのは僕も辛いから、一思ひに打ち殺してやらう。」

ビスマルクは、平氣な顔で身動きの出來ない友達に狙ひをつけた。

「おい。じつとして居ないか。的が狂ふぢやないか。僕は一思ひに遣つ付けたいから、君の頭

に狙ひを付けてるんだよ。」

ビスマルクの残酷な言葉に、友達はもうぬかるみの事など思つてゐられなかつた。何でも相手の銃先から遁れたい一心で、死物狂に跳いてゐるうちに、古い柳の根を見つけて、夫に縋つてやつとこざで這ひ上る事が出来た。

ビスマルクは笑ひ笑ひ銃を胸から下した。其の落つきが自分を救つたのだなと氣ついた友達は、

「有難う。有難う。」

と溝鼠のやうな身體をして、両手を擴げて相手に抱きつかうとした。ビスマルクは慌てて逃げ出した。

「もう好い。もう好い。そんな様をしてお禮などには及ばんよ。」

避暑法

避暑 むかし、有馬侯の下屋敷が品川にあつた。海に臨んだ結構な普請で、欄干なども朱塗の氣取つたものであつた。

避暑 暑 暑 暑 ある夏の土用に、寶生太夫が親子打揃つて、この下屋敷へ暑さ見舞に上つた事があつた。土用の最中だといふのに、座敷には蒲團が天井に達きさうに高く積んであつた。よく見ると、その上に殿様が裸のまま胡坐をかいてゐた。全くの素つ裸で、たつた一つ紅絹の犢鼻褌を締めてゐるだけだつた。

避暑 法 寶生太夫は可笑しくて溜らなかつたが、笑ふ譯にも往かなかつた。すると給仕の女が、黒塗に金蒔繪をした七つ梯子をかけて、蒲團の山へ上つて往つた。そして寶生が暑さ見舞に來た由を申し上げた。

避暑 有馬侯は蒲團の上から剽輕な顔を覗けて下を見た。

「養生か。よく参つたの。こんな高い所にゐても、今日は殊の外暑い。ま、ゆるりと休息してまゐれ。」

と、笑ひ笑ひ言つたさうだ。

つまり他人よりか一段高いところにゐるといふ事だけで、少しは涼しい積りらしい。してみると、避暑にも色々流儀がある。

斜視睨み

米國の副統領マアシャル氏が、先日議會の入り口で寫眞師二人に呼びとめられた。相手は何れも新聞社の寫眞師であつた。

「閣下。少し右の方へお向き下さい。」と一人の寫眞師が言つた。すると、今一人の寫眞師は、「どうぞ左の方へ少し……。」

と言つて腰を屈めた。

マアシャル氏は、あひにく顔を唯一つしか持ち合はさなかつたので、せうことなしに、先づ一人の寫眞師の方を向き、それから次の方を向いてやつた。

「有り難う。」

寫眞師は挨拶をして、直に右と左に別れようとした。

「一寸待ち給へ。」副統領は呼びとめた。「君達の用事は済んだかも知れないが、私の方に少し言ひ分が残つてゐるから。」

寫眞師はちらと變な眼つきを交はしながら立ち停つた。

「君達は、むかしむかし斜視睨みの男が、牛を殺さうとした話を聞かなかつたかい。」副統領は哲學者のやうに静かな皮肉な口振で話し出した。「斜視睨みの男は自分の助手に言つたさうだ。おい、俺は牛の眉間を叩しつけようと思つてるのだから、巧く牛を持つてゐて呉れなくつちや困るつて。」

「へえ……。」二人の寫眞師は小首を傾げた。

副統領は言葉を次いだ。

『旦那。お前さんが睨んでる方へ牛の頭を持つてくんですかい。』と助手が訊くと、斜視睨み

の男は『さうだよ。解つてらあね。』と怒鳴りつけた。すると、助手は『ぢや、勝手にするが
いいや。お前さんの眼は兩方を睨んでるが、牛には頭は一つしきや無いんだからね。』

阿父の着物

亞米利加の大富豪、ロックフェリアがまだ盛年の頃、何處へ出掛けるにも、見窄らしい服を
着て平氣であるので、仲のいい友達はひどく氣に病んだものだ。

友達はいづれもおめかしや揃ひと來てるるので、ある日の事辛抱がしきれないで、ロックフ
エリアに注意をした。

「いつか中から、一度言はうと思つてゐたんだが、君の身装は餘りぢやないかね。」

ロックフェリアは腑に落ちなささうに、

「何ういふ意味なんだね。僕の身装があんまりだと言ふのは。」

友達は情無ささうな顔をした。ロックフェリアが生れて一度も新約全書を読まなかつたと白

狀したところで、まさかそんな表情はすまいと思はれる程の顔だつた。

「何ういふんだか、一寸見たら判りさうなものぢやないか。僕達と比べてみたまへ、君の身装
は随分見窄らしいぢやないか。」

ロックフェリアはやつと氣が付いたやうに、友達の身装と自分のとを比べて見た。

「別に見窄らしくは無いぢやないか、唯君達のが綺麗過ぎるんだよ。」

「だつて……。」と友達は焦慮つたさうに言つた。「君は吾々の仲間て一番富豪なんぢやない
か。」

「さうかも知れんな。」富豪は相變らず平氣な顔をして言つた。「それにしたつて、僕は別に見
窄らしくも思はんが……。」

「見窄らしいよ。何と言つたつて見窄らしいよ。」友達は暴になつて喚いた。「第一君の阿父さ
んの事を考へて見給へ。阿父さんは何處へ出るにもちゃんとした身装をしてゐたよ。」

「さうだつたかなあ。」ロックフェリアは笑ひ出した。「だが、君、今僕の着込んでるのは、そ
の阿爺おやぢの服なんだよ。」

辯護士

米國の大統領リンカンが、まだ田舎辯護士で齷齪してゐた頃、ある時訴訟用で小さな田舎町に旅立しなければならぬ事になった。

尋でだから言つておくが、リンカンが田舎辯護士をしてゐたのが事實だからといって、田舎辯護士が大統領になると限つたものではない。辯護士といふものは、いつも自分勝手な理屈をつけたがるものだから、此の點だけは特に言つて置かなければならぬ。

その晩、リンカンが泊る筈になつてゐる旅籠屋は、停車場から十四哩ほど引込んだところにあつた。リンカンはがた馬車に乗つて旅籠屋に出掛けた。途中で雨が降り出した。辯護士は路傍のごろた石と一緒に、頭からぐしよ濡れになつた。

宿に着いたリンカンは、附近を見廻して不機嫌な顔をした。部屋は馬小舎のやうに薄汚かつた。その上暖爐には小さな火しか燃えてゐなかつた。火の周圍には田舎の旅の者と仲間の辯護

士が四五人、龜縮んだ手を出してがたがた顫へてゐた。どの手もがまだ運を掴んだ事が無いらしかつた。

皆は木片のやうに黙つて衝立つてゐたが、暫くすると仲間の一人がリンカンに言つた。

「ひどく凍みるぢやありませんか。」

「然うですね。」とリンカンは返事をした。「地獄の熱さも溜らないが、ここの寒さもまた格別ですね。」

「へえ、地獄の熱さですつて。貴方は地獄においてになつた事があるんですか。」

田舎客が口を出した。

「居ましたよ。」リンカンは眞面目くさつて言つた。居合はせた辯護士は顔を見合はせて笑つた。

何れも腹の減つた様な笑ひ方だつた。

田舎客は険しい顔をして訊いた。

「それぢや伺ひますが、地獄つて一體どんな處です。」

「ちやうどここのやうでね。」未來の大統領はぼやくやうに言つた。「法律家はみんな火の周圍

に立たせられて居ましたよ。」

流石にリンカンだ。辯護士はしながらも、すべて法律家の靈魂は燒栗のやうに地獄の火で黒焦にされるものだと思つてゐたのだ。單にこの點だけでも彼には大統領の値打があつた。

呉々も言つておくが、その晩煖爐の周圍に立つてゐた辯護士は五六人あつた。そして唯一人リンカンだけが、靈魂を燒栗のやうに黒焦にしないうで済んだ。

黒人の盗み

イネズ・ミルホオランド・ボアスヴン女史といふと、米國でも女權論者のちやきちやき、加之に數へる程しか無い女流辯護士の一人として、相應名を賣つてゐる婦人だ。

この女辯護士と、同じ建物のなかで隣り合せて住んでゐる男が、ある時洋服を一着盗まれた。色々詮議の末が、門番の黒人に嫌疑がかかつて、黒人は自分の部屋で朝食を食つてゐる所を押へられた。(忘れても用心しなければならないのは、凡ての訪問客は大抵朝早く來るとい

ふ事だ)

黒人は女辯護士に手紙を出して、熱心に自分の辯護を頼んだ。黒人を法廷で辯護するのは、黒人を天國へ引張りあげるよりか、ずつと愉快な事に相違ない。なぜといつて、天國へ引揚げられた黒人は、そのまま二度と姿は見せないが、牢屋から出て來る黒人は、また同じ辯護士の事務室に顔出しするに極つてゐるから。

女辯護士はその辯護を引請けて、法廷に立つた。そして色々の方面から熱心に喋舌つた効があつて、黒人は都合よく無罪になつた。

黒人はその翌朝早く女辯護士の事務室に入つて來た。

「先生、昨日は色々どうも有難う御座いやした。」彼は白い齒を見せて追従笑ひをした。「實際あの服は私がちよろまかしたに相違ありやせんが、先生の辯護を聞いてると、何うやら私が盗んだつてえのは怪しくなつて來やした。事によつたら、私の仕事ぢや無かつたかも知れやせんぜ。」

歐陽詢と石碑

むかし、唐の歐陽詢が馬に乗つて、ある古驛を通りかかると、崩れかかった道の端に、苔のへばりついた古い石碑が立つてゐた。碑の文字は瞥見ちよつとみにも棄て難い味ひがあつた。

丁度そこへ百姓が一人通りかかった。手には引いたばかりの大根を提げてゐた。歐陽詢は呼びとめて訊いてみた。

「この碑は誰の書だか、お前知つては居なからうな。」

「知らねえと思ふ人間に、なぜ聞かつしやるだ。」百姓は艶むくれた顔をあげた。「これはあ、索靖といふ偉え方の書だつべ。」

「ふむ、索靖か。」

歐陽詢は馬を駐めたまま、じつと石碑の文字に見惚れてゐた。馬はしあはせと文字の鑑めやす定ぢやうが出来なかつたので、その間にせつせと道つ端の草を食べてゐた。

暫くすると、歐陽詢は氣がついたやうに馬をせき立てた。馬は食べさしの草を啣くはへたまま、ぼかぼかと歩き出した。やつと小半丁も来たかと思ふと、歐陽詢はだしぬけに手綱を引つ張つて、馬を後へ返さうとした。馬はむら氣な主人の仕打を笑ふやうに澁しぶくりながら、また後返りをした。

歐陽詢は馬から飛び下りて、石碑の前に立つた。

「巧いな。」

彼は、小首を傾げたまま、いつまでもいつまでも文字に見惚れてゐたが、たうとう立ち草臥ふれたと見えて、馬の背から敷物を取り下して、その上に坐つた。

そしてその晩も、翌る晩も、また翌る晩も、石碑の下に野宿をして、じつとその文字に惚々としてゐるので、馬はすつかり腹を立てて、その邊の草つ原にごろりと横になつた。横になつたからといって、馬は猫や大學教授のやうに哲學などは考へなかつた。馬は日本の若い實業家と同じやうに食ふ事と雌メの事ばかり考へてゐた。

歐陽詢が馬を起して、やつと石碑の下を去つたのは、丁度四日目の朝だつたさうだ。

蛇

戸田采女正一西といふと、徳川秀忠について眞田昌幸を信州上田の城に攻めた智慧者だが、この智慧者の家來に、人なみ外れて蛇を恐がる男があつた。

ある夏の夕方、仲よしの朋輩の一人が、荒縄の水に漬つたのを、

「そら蛇だ。」

と、この男の脚もとに投げ出したことがあつた。男は、

「呀！」

といつて、棒きれのやうにばつたりと地面に倒れたが、その儘顔を眞青にして氣絶してしまつた。

居合はした人達は、慌てて醫者を呼びに走つた。急場の間に合ふのは、大抵藪醫者と極つてゐるが、亡くなつた後での名醫よりは、息があるうちの藪醫者の方が有難かつた。その藪醫者

は氣つけ薬と血の道の薬とをこつちやにして、相手の口に含ませたらしかつたが、女に利く薬は男にもいいと見えて、氣絶した男はやつと息を吹き返した。

息を吹き返すと、その男は直ぐに刀の柄に手をかけて、先刻悪戯をした男に詰め寄つた。

「人中でこんな耻をかかされちや、黙つて居られない。さあ、果し合ひをしよう。」

「いや、悪かつた。重々あやまる。ほんの悪戯だつたんだから宥して呉れ。」相手の男は先刻の縄を取り上げて見せた。「見給へ。投げ出したのは蛇ぢやなくて、縄だつたんだよ。」

縄だつたと氣が注くと、男は一層聲を荒くした。逆もこの儘では納まるまいと思つた悪戯男は、すつくと立ち上つた。

「それぢや仕方がない。如何にも果し合をしよう。だが、他人の迷惑になつても何だから、明日の夕方人通りのない原つばで行る事にしよう。」

翌る晩になると、例の男はかひがひしい白装束で長い刀を引っこ抜いて待つてゐた。悪戯男は瓜のやうに素つ裸になつてやつて來た。

「乃公の得物はこれだ。」

彼はかういつて、長い竹竿に五尺許りの青大將のによろしたのを結びつけて、相手の

鼻先で揮つてみせた。
蛇嫌ひの男は、夫を見ると刀を其處へ投げ捨てたまま、犬のやうに走つて、自分の邸に逃げ込んでしまつた。

喧嘩は凡てかうするものである。

小説家の面會

佛蘭西の小説家エミール・ゾラは、新聞記者との會談をひどく怖がつてゐた。例のドレエフス事件の折などは、自分も進んで其の關係者の一人となつただけに、新聞記者につかまつて、大袈裟に疊み掛けた質問にでも出會しはしなからうかとびくびくものでゐた。

ところが、其の事件の最中に、ある新聞記者は是非ゾラに面會しなければならぬ用事が出来た。だしぬけに名刺を突きつけたところで、時節柄この文豪がすぐにお目に懸らうとも言ふまいし、記者はほとほと當惑した。

記者は困つた折にいつもするやうに、煙草を喫かさうと思つて、上衣のポケットに手を入れた。指先に觸れたのは、煙草では無くて、やはりその頃の文士の一人フランソア・コツペエの詩集であつた。

記者は先刻友達に出會つた時、コツペエの詩集を読みさしのまま、ポケットに入れた事を思ひ出した。そしてそれと同時に、コツペエが風邪か何かで臥つてゐるのを思ひ出すと、覺えず小躍りして叫んだ。

「さうだ。お氣の毒だが、コツペエさんの御厄介にならう。」

記者は其の脚ですぐにゾラを訪ねた。そして受付の男を見ると、急に悲しさうな顔をして、「フランソア・コツペエさんが亡くなりました。御主人がまだ御存じでなければ一寸知らせる上げて下さい。」

と出鱈目な事を言つた。

間もなく、ゾラは右手にペンを持つたまま、あたふたと飛び出して來た。

「なに。コツペエが亡くなつたつて。まあ、君。此方へ通つて詳しく話してくれたまへ。」
應接室へ通されると、年若な記者はいきなり頭が卓子に打突かる程大きなお辭儀をした。

「まことに申譯がございません。コツペエさんはお風邪のやうには聞きましたが、お生命に別條はございません。唯さうでも申さなければ、先生がなかなかお會ひ下さるまいと思つたものですから……。」

ゾラは夫を聴くと、鐵瓶のやうに湯氣を立てて怒り出した。何しろあの通りの駄文家の事だから、例の長文句で立續けに口汚く言つたに相違ないが、ひとしきり嵐が過ぎてしまふと、夫でも一々記者の質問に答へて、自分の意見を吐かずには置かなかつた。

痘面の笑顔

今は孝行者が多い世の中だから、孝經など讀まなくなつたが、むかしは何ぞといつては、此の經書を繙いたものだ。ある時備前少將光政が、池田出羽、池田伊賀などといふ家老達と一緒に、この書物を読んだ事があつた。

争臣の章まで來ると、光政は眼をあげて皆の顔を見くらべた。

「さ、ここぢやて。お前達にとつて忘れてはならないのは。もしか乃公に善からぬ事があつたら遠慮なく諫めて呉れ。そしてお前達も人の諫めに會つたら、屹度その言葉を請け容れるやうにしなくつちやならんぞ。」

皆は一度に頭を下げて恐れ入つた。——頭といふものは重寶なもので、どんな間違をしてゐても、叮嚀に辭儀をさへすると、大抵の人は、

「乃公の云ふ事が、よく頭に入つたと見えるて。」

と、すぐに氣色をなほして容してくれようといふものだ。この場合頭が少し位禿げて居ようと、尖つて居ようと何の差支はない。そしてそれから五分間と經たないうちに、今の事情をすつかり忘れてしまふのも、矢張りこの頭である。

一度に下げた頭のなかに、唯一つ下げやうの足りない頭があつた。その持主は中川權左衛門といふ男だつた。權左衛門は一膝前へ乗り出して來た。

「寔に結構なお言葉で、お家萬歳の兆と有難く存ずる次第でございますが……。」彼は一寸眼をあげて殿様の顔を見た。「正直に申しあげますと、殿様のお顔は痘瘡あはたの痕が見苦しく目立つていらつしやる上に、お眼の中が鋭いので、御機嫌の悪い時は二目と拜まれないやうに存じ

まする。で、眞實に諫言をお好みになりますなら、何よりも先きにお顔を和やかに遊ばされま
すやうに……。」

備前少將は夫を聞くと、夏蜜柑のやうな痘面を少し赤くしてゐたが、暫くすると、
「成程な。よく言つて呉れた。禮をいふぞ。」

と軽く頷いて見せた。それからといふもの、少將は家來の前では、痘面あぶたづらを捻ぢ曲げるやうにし
てにこにこしてゐた。——殿様にしては、感心な心掛であつた。

怖 い 物

どんな人にも好き嫌ひといふものはあるものだ。むかし有馬兵庫頭といふ人があつた。そ
の人は一代のうちに色々な仕事もしたらしいが、その仕事よりも蟹を恐がつたといふ事で今だ
に名を残してゐる。野道で偶々赤い爪をふり上げた蟹に出會すと、兵庫頭はぶるぶる顫へて、
いきなり馬を引き返して逃げ出したものださうだ。もしか身持の悪い蟹が、金を貸せとでも言

ひ出さうものなら、兵庫頭は馬の鞍から知行も何も振り捨てて駈け出して往つたかも知れな
かつた。

大久保伊勢守といふ人は、ひどく蜘蛛を怖れた。屋敷の植込を徜徉してゐる時、青白い梔子
の花蔭に女郎蜘蛛が居睡りをしてゐるのを見つけてもすると、眞つ青になつて抜き脚して逃げ
出したものだ。

蛙は愛嬌者で、臍をもつてゐない癖に、人間並みにその一つを持合せてゐるらしい顔つきを
してゐるが、廣い世間にはこんな愛嬌者を何よりも恐がる人さへある。

それは栗原主殿頭といつた男で、この男は女房を持つてゐたが、その女房よりも、地震より
も、蛙の方が怖ろしかつた。ある時伴の奴を一人連れて野道を歩いてゐると、だしぬけに蝦蟇
に出會つた。蝦蟇はさつきまで物蔭で大學教授のやうに哲學を考へてゐたらしいが、滅法腹が
空いたので、のつそりと明るみへ這ひ出して來たところだつた。

主殿頭はそれを見ると、一度に二間ほど後に飛びしきつた。そして刀に手をかけてきつとな
つた。刀は備前の眞眞物だつた。

「憎つくき蝦蟇めが。おのれはまだ主殿頭を知らないと見えるな。」

彼は思ひきり大きな聲で怒鳴りつけた。

實際蝦蟇はまだ主殿頭を知らなかつた。で、目をあけて念入りに相手の顔を見たが、別に秀れて高い鼻を持つてゐるわけでもなかつた。

「おのれ、早く退り居らんか。」

主殿頭はぶるぶる顫ひながら、刀をひっこ抜いてみせた。

だが、蝦蟇の方では別に後じさりをする必要もなかつたので、二足、三足のそのそと前へ這ひ出して來た。主殿頭はそれを見ると、

「いや、膽の太い奴めが。そちには怖いといふ事が判らんと見えるな。」

そのまま刀を擔げて、一散に逃げ出したさうだ。

惡物食ひ

「犬を食つた。」

といふと、感心な婦人會の會員達は、

「可哀さうに生活が難かしいんだわ。」

と、すぐに有り合せの麵麩屑と、讀みさしの雑誌とを贈つて寄さうとするかも知れないが、犬を食つたのは、何も肉が高くなつたからではなかつた。

それは犬の肉が大層好きだつたからで、この惡物喰ひは、徳川の末頃江戸に住んでゐた男だつたが、一日犬を食はなければ氣分が悪くなるので、そんな折には豫て剝いて置いた犬の皮を少しづつ煮て食べてゐたさうだ。

それと同じ頃に、江戸に大久保八右衛門といふ武士がゐた。この男の下郎にひどく煙草の脂ヤニが好きなのがあつて、閑さへあると、いろんな人から脂を貰ひ集めて、それを椀に盛つてうまさうに食べてゐた。

それとよく肖てゐるのは、松平大進といふ武士のやり方で、酒宴になると、極つて長羅宇ですばりすばりと煙草をふかし出す。そして煙草が半分ばかし燻つた頃を見計らつて、盃のなかにその吸殻を叩き込んで、ぐつと一息に煽飲りつけたものだ。

灰屋紹益が愛人吉野太夫の亡くなつた時、火葬にした灰を土に埋めるに忍びないからといつ

て、酒に浸してそつくり嘸み下してしまつたのは名高い話だ。
それと同じなのは、幕末頃に生きてゐた何とか三郎といふ男で、悪物食ひで評判を取つた程あつて、女房の叔母が亡くなると、火葬にして、その灰をアスピリンか何ぞのやうにすつかり嘸み下してしまつた。

それを見た女房は、木の葉のやうに眞青になつて顫へ出した。

「まあ、何といふ怖ろしい人だらうね。お前さんは。現在女房の叔母の骨を食べてしまふなんて。まるで鬼ぢやないか。もうもうこんな家には一刻の間もじつとしては居られない。」
彼女はすぐに表へ飛び出さうとした。三郎はその袂を押へて笑つた。

「そんなに怒るもんぢやないよ。お前がそんなに言ふんだつたら、これからお前の亡くなるまでは、もう人の骨など食べやしないから。」

三郎め。女房が亡くなつたら、またその骨を食べてしまはうと思つてゐたのだ。

皮 肉

皮 英國のウインズル王宮の皇室圖書館に、毎月の雑誌が取揃へてある雑誌棚がある。その棚の上に現代の名高い人達の寫眞帖が幾冊か載せられてゐる。寫眞帖はその人達の職業によつてそれぞれ別冊になつてゐる。

肉 今の英國皇太子がまだ幼かつた頃、ある日その雑誌棚の前に立つて、多くの寫眞帖のなかから、「各國民元首帖」といふのを引張り出してじつと見てゐた。

夫には胸一杯びかびかする勳章を下げてゐる人が多かつた。なかに唯一人質素なフロツクコートを着て、苦り切つた顔をしてゐる男があつた。皇太子は夫を見ると後を振りかへつた。そこには父君のジョージ陛下が立つてゐられた。

「阿父様。これ誰なの。」

「夫は米國の大統領ルウズヴェルト氏だ。」

皇太子は可愛らしい指さきで、ルウズヴェルト氏の鼻の上を押へた。氣難しやの大統領は噓をしさうな顔になつた。

「阿父様。この人惻怛者。それともお馬鹿さん。」

「さうだな。」ジョオジ陛下はにこにこ笑つて「ルウズヴェルト氏はなかなか偉い方だよ。まあ、天才とでも言ふのだらうて。」

それから四五日経つて、ジョオジ陛下が何か見たいものがあつて、その「各國民元首帖」を開けてみると、ルウズヴェルト氏の寫眞だけが取り外されて見えなかつた。

「訝しいな。」

何氣なく側にあつた「現代人物帖」を取り上げてみると、その第一頁目に失くなつた筈のルウズヴェルト氏の寫眞が挿まれてあつた。

陛下は皇太子を召された。

「この寫眞を移したのはあんたかい。」

「私よ。」

「何か理由があつたのかい。」

「だつて、阿父様。あなたこなひだお話しになつたぢやないの。」皇太子は得意さうに言つた。「ルウズヴェルトさんは天才だつて。だから私元首帖から引っこ抜いて、人物帖の方へ入れたの。夫が悪くつて。悪かつたら御免なさいよ。」

青磁の皿

むかし、鴻池家に名代の青磁の皿が一枚あつた。同家ではこれを廣い世間にたつた一つしか無い寶物として、土藏にしまひ込んで置いた。そして主人が鬱々すると、夫を取り出して見た。すべて富豪といふものは、自分の家に轉がつてゐる塵つ葉一つでも、他家には無いものだと思ふと、それで大抵の病氣は癒るものなのだ。

ある時鴻池の主人が、好者の友達二三人と一緒に、生玉へ花見に出掛けて往つたことがあつた。一獻掬まうといふ事になつて、皆はとある料理屋に入つた。

亭主は豫々^{かねがね}蟲虱になつてゐる鴻池の主人だといふので、料理から器まで凝つたものばかりを

並べ立てた。そのなかに、例の秘藏のものと同じ青磁の皿に、肴が盛られたのがあつた。鴻池の主人は、驚いて皿を取り上げて見た。擬ふ方もない立派な青磁である。側にゐる誰彼は幾らか冷かし氣味に、

「ほほう、結構な皿や。亭主、お前とこはほんまに偉いもんやな。鴻池家で寶のやうに大事がつとる品を、突出しに使ふのやよつてな。」

鴻池の主人は、皿を掌面に載せたまま、じつと考へてゐたが、暫くすると亭主を呼んで、この皿を譲つてはくれまいかと、疊の上に小判を三十枚並べた。亭主は吸ひつけられたやうに小判の顔を見て深い息をついてゐた。そして忘れものでもしてゐたやうに慌てて承知の旨を答へた。

鴻池の主人は、掌面の皿をいきなり庭石に叩きつけた。青磁の皿は小判のやうな音を立てて粉々に碎け散つた。

主人は飲みさしの盃を取り上げながら言つた。

「あの皿は家の品とそつくり同じや。同じ青磁の皿が世間に二つあるやうでは、家の顔に關はるよつてな。」

そして睫毛一つ動かさうとしなかつた。

獨帝の癖

獨帝には妙な癖がある。それは何か困つた事に出會すと、すぐと自分の耳朶を引張らずには居られないといふ事だ。

大分以前の話だが、獨帝には祖母さんに當る英國のギクトリア女皇が崩くなられて、葬儀の日取が電報で獨帝の手許に報ぜられて來た事があつた。その折獨帝は六歳になる甥を相手に、何か罪のない無駄話に耽つてゐた。

獨帝は侍従の手から電報を受取つたが、なかに何か氣に入らぬ文句でも書いてあつたものか、(獨帝は英吉利と英吉利人とが大嫌ひであつた。) すぐにいつもの癖を出して、自分の耳朶をいやといふ程引張つた。

夫を見て甥は言つた。

「伯父ちゃん。何だつて、そんなに耳を引張るの。」

「うむ。一寸困つた事が出来たでの。」

「困ると、伯父ちゃんはいつも耳引張るの。」

甥は不思議さうに訊いた。

「さうぢや。」

「そんなら、もつともつと困る事があつたら、伯父ちゃん何うするの。」

「その時はな。」獨帝は電報を卓子の上に投げ出し、その手でいきなり甥の耳を撮んだ。「その時はかうして他人の耳を引張つてやるのぢや。」

猶太人と狗

マリイ・アンチンといふ猶太種の女は、火のやうな激しい性格で、今アメリカの各地で頻り

と演説をして歩いてゐる。その演説といふのは、猶太人が傳説的に持ち傳へてゐる神様のお約束の理想郷は、他でもない亞米利加の事だといふのだ。

成程聞いてみると、尤もな話で、亞米利加には、猶太人の好きな金は有り餘る程あるし、口喧しい神様は居無いし、加之に男はみんな女に親切だといふから、猶太種の女が理想郷とするに打つてつけの土地柄だ。そして今一ついい事には、亞米利加人といふ奴は、こんなお世辭をいふと極つたやうににこにこして、

「マリイ・アンチンはよく物の解つた女で、おまけにすてきな美人だ。」

と、ぢきに相手を美人にしてくれようといふものだ。

この女が、最近土耳其から歸つたばかりの男の友達と何處かで會つた。男は色々な面白い旅行話を聞かせた後、指の節をぼきぼき鳴らしながら、

「さうだ。忘れてゐたが、土耳其に面白い二つの習慣があるんですよ。」

と、妙に調子をはずませて話し出した。

「それはね、猶太人と狗だと見ると、ふんづかまへて叩き殺してもいいんですよ。」

マリイ・アンチンの圓い顔は銀貨のやうに眞青になつた。

「まあ、仕合せだつたわね。あなたや私がそんな國に住んで居なかつたのはね。」
男の友達は眼を圓くして吃驚した。自分は猶太種ではない。してみると、相手は自分を狗と間違へてゐるのだと思つて……

馬の上から

男爵石黒忠恵氏の話によると、自分を偉くしたのは半分以上川路左衛門尉聖謨の力ださうだ。川路左衛門尉といへば、仙石騒動を裁いた名代の傑物だつた。石黒氏の父親は子供を偉くするためには、何かすてきな物を見せなければならぬといふので、そこで川路左衛門尉の前へ連れて往く事に定めた。

石黒氏の父親は、いつだつたかわざと相手の目に立つやうにと、變り色の羽織を着て左衛門尉に會ひに往つた事があつた。その折左衛門尉が、自分は毎朝馬で馬場先を運動するのを樂しみにしてゐる事を話したので、石黒氏は父親に牽かれて、朝風くから馬場先に出掛けて往つた。

左衛門尉は馬に乗つてやつて來た。石黒氏は父に催促せられて、慌てて頭を下げてみた。左衛門尉は自分の前に茸きのこのやうに踞つくだつてゐるこの二人に目をつけた。

「や、お前いつぞや遣つて來た石黒ぢやの。」

左衛門尉は馬の上から聲をかけた。馬は立ち停つて叱りつけるやうな目つきで二人を見おろした。

「はい、石黒で御座います。御健勝の御容子を拜して何よりも……。」

石黒氏の父親は、かう言つて茸のやうな伴の頭をまた押へつけた。

「其處に居るのは、お前の伴かい。」

左衛門尉が然ういふと、馬もその積りて高慢臭い顔をして茸のやうな伴の頭を見た。

「はい、手前の伴でございます。何卒お見知り置き下されまして……。」

石黒氏は父親に催促せられて、今まで下げ詰めだつた頭を擡げた。見ると、馬の上で左衛門尉の二つの眼が蠟燭のやうに光つてゐた。

「いい兒だの。勉強して偉い者になれ。忘れるんではないぞ。」

左衛門尉はかう言ひ捨てて、馬に一鞭あてた。馬は自分で偉い者の手本を見せるやうに、後脚で砂を蹴つて飛んだ。

「勉強して偉い者になれ。忘れるんではないぞ。」——石黒氏の説によると、此の一言を忘れな
いでゐたから、今の身分になつたのださうだ。實際結構な言葉だが、かういふ言葉は、矢張馬
の上から茸のやうな子供に聞かせる方が、一番利き目があるやうだ。

演説の用意

長い文章なら、どんな下手でも書く事が出来る。文章を短かく切り詰める事が出来るやうに
なつたら、其の人はいつぱしの書き手である。これは演説にもまたよく當て嵌る。

ウイルソン大統領といへば、米國でも聞えた雄辯家であるが、先日、仲の善いある友達が
が大統領に對つて、

「あなたは名代の演説上手でいらつしやるが、一つの演説を用意なさるに、どの位の時間が必要
りますね。」

と訊いたものだ。何事によらず、素人といふものは、出来上る時間を訊きたがるもので、もし
か畫家に對つて、何よりも先に、

「この畫をお仕上げになるのに、幾日程お掛りでしたね。」

と、訊く人があつたなら、其の人がどんなに美人であらうと、先づ素人だとして差支ない。

ウイルソンの友達も、いづれは何を見ても鼻を鳴らして感心する輩だつたに相違ない。

ウイルソンは答へた。

「どの位の時間といつて、それは演説の長さによる事ですからね。」

「いや御尤もの事で。」質問者はそれだけで、何も角も飲み込めたらしい伶俐さうな顔をした。

「してみますと、議會での大演説などは、お支度になかなかお手間が取れる事でせうな。」

「いや、さういふ意味ぢやない。」と雄辯家の大統領は上品に口を歪めて笑つた。「一番手間を
取るのは、所謂五分間演説といふ奴で、あれを用意するには、正直なところ二週間はかかりま
すよ。」

「ほう、そんなもので。」質問者は何だか腑に落ちなささうな返事をした。

「それから、三十分位の演説だつたら、先づ用意に一週間といふ所です。もしか喋舌れるだけ喋舌つてもいいといふのだつたら、夫には準備なぞ少しも要りません。今すぐにと言つて、すぐにも喋舌れます。」

素人よ。もしか感心する必要があつたら、演説でも、文章でも、成るべく短いのを選んだ方が無難だ。早い話が、女房の諷刺あてこすりにしても、手短な奴にはちよいちよい飛び上る程痛いのがある。

靄山の娘

貫名海屋の系統を傳へた谷口靄山が、まだ京都の下長者町に居た頃、南畫好きのある男が、態々大阪から訪ねて往つて弟子入りをした。

靄山は娘と二人で其處に住んでゐたが、その日は娘に留守番でも言ひつかつたものと見え、皺くちやな口で、

「今日は誰も居ぬての……。」
と斷つて、薄茶一服立てようともしなかつた。その代りに薄茶よりも水つばい南畫の講釋をくどくどと言つて聞かせた。

南畫を習はない先に、南畫は迎も習へないものだと思つた其の男は、折を見て歸らうとする
と、靄山は押へるやうな手つきをして引留めた。

「一寸待ちな。今娘が歸つて來たさかい、お引合せしまつさ。」

その男は畫も好きだつたが、それ以上に女が好きであつた。畫にはまだ解らない點もたんとあつたが、女の事だけは何も角も大抵知り抜いた積りであつた。それだけに娘に引合せると聞いては歸る譯にも往かなかつた。で、居ずまひを直したり、一寸襟に手をやつたりした。

間もなく隔ての襖が開いて、お茶が運び出された。

「これが俺の娘や。不束者での……。」

といふ靄山の言葉に、初めて氣が附いたやうに、其の男は叮嚀にお辭儀をした。そして顔を上げて相手を見ると吃驚した。

娘といふのは、小皺の寄つたお婆さんだつた。

よくよく考へてみると、不思議でもなかつた。その頃鬮山はもう七十の上を越してゐたらしかつたから、五十近い娘があつたところで、別段腹を立てる程の事でも無かつた。その男はお茶も碌に飲まないで、そこそこに挨拶して歸つた。そして二度と鬮山の門を潜らうとはしなかつた。

静かな死

茶人橋廣樹の死際こそ、此の上もなく静かなものだつた。その日は大阪にゐる友達から、名高いお城の黄金水を送つて來たから、夫でお茶を煮るのだといつて、仲よしの田能村竹田などを招いて、氣輕さうに立働いてゐた。

火を吹きおこしたり、水瓶を洗つたりしてゐるうち、廣樹は急に氣分が悪くなつたといつて横になつた。竹田は今更茶でもないのので、枕頭に坐つて看病してゐると、曉方に廣樹は重さうな頭をもち上げて、竹田を見た。

「いろいろ有難う。だが、今度は逆も助かるまい。もう茶を立てる間も無ささうだから、あの黄金水を飲んでお別れがしたいものだな。」

竹田は水瓶を引き寄せて、一口飲んで廣樹にさした。病人は鶴が水を飲むやうな口つきをして、美味さうに一口飲みほした。そして今一度といつて竹田にさした。竹田はまた飲んだ。廣樹は枕に顔をもたせて、「今歌が一つ出來たから、どうか書き留めてくれ給へ。」といふので、竹田は筆を執つた。

ちよろづとこそ

むすぶべき黄金水

汲みかはすれど

水泡とぞ消ゆ

廣樹は懶さうに頭を擡げて、その拙い歌を見てゐたが、獨語のやうに、

「おや。水の字がさし合ひになつてゐる。死ぬまでの氣紛れに一つ考へ直してみよう。」
 と言つてゐたが、暫くすると、

「さうだ、『泡と消えゆく』でよかつたんだ。」

と呟いたかと思ふと、そのまま息が絶えてしまつたさうだ。静かな死際だ。唯一つ欲をいふと、歌だけが餘計だつた。日本人は地味で、生一本で、別に言分はないが、唯一つ辭世を詠みたがるのだけは贅澤すぎる。死際におしやべりは要らぬ事だ。狼のやうに黙つて死にたい。

頤の外れたのを治す法

俳人K氏のお父さんは、醫者であつた。醫者であることすら大變なのに、おまけに藪醫者であつた。藪醫者といふと、蝸牛かたつむりや、蠅螂かまきりと同じやうに草ぶかい片田舎にばかり住んでゐるやうに思ふ人があるかも知れないが、實際は都にも多いやうだ。とりわけ博士などと肩書のついた輩てあひに、そんなのが少くないやうだ。唯幸福なことには、肩書がつくと、病人がそれを信用してかかるから、癒らない筈の病氣までついひよつくり快くなつたりすることがあるので、病人は勿論、お醫者自身までが、それを自分の診察みたくがいいからなのだはと穿き違へて、本當は藪醫者であ

るのに氣がつかないまでのことである。だが、K氏のお父さんは博士でもなかつたから、都へも出ないでおとなしく田舎に住んでゐた。

流行らない醫者にとつては田舎も住みよくなかつた。老人は毎日向ぼこりをして、もつと病人の多い國はないものかなどと考へてゐた。さう思つて見ると、その邊の人は男も女もみんな馬のやうに達者だつた。

ある日めづらしく一人の病人がやつて來た。「來たな」とお醫者はあわてて玄關へ飛び出して見た。そこに立つてゐるのは、間のぬけた顔をした男で、涎を流しながら何か他愛もないことをいつてゐた。よく聞いてみると、頤おとがひがはづれて困つてゐるといふのだつた。何でも一人二人醫者にかかつてはみたが、どうも治りきらないらしかつた。

「おれの運が向いて來たのだ。」

と醫者は腹の中でつぶやいた。そしてこの病人を治すと、外では治らなかつただけに、自分の名醫であることが、ばつと世間に擴がつて、これからはとても受けきれないやうな大勢の病人が押し寄せて來るに相違ない。それには宅の玄關は餘り狭すぎるから、何でも近いうちに大工を呼んで建替への見積りをとらなくちやならぬと、そんなことまでも考へた。

だが、ほんたうの事をいふと、醫者はどうして頤のはづれたのを治したのか、まるで見當がつかなかった。で、こつそり次の室に入つて讀み古した醫術の本を大急ぎで繰つてみたが、その本にはお産のことばかり詳しく載つてゐて、頤のことなどは唯の一行も書いてなかつた。「困つたな、何かいい分別はないものかしら。」

醫者は手を拱んで考へた。アンチヘブリンを服まさうかとも思つたが、それにしても熱が少しもなかつた。下劑をかけようかとも思つたが、それにしても腹に少しの滯りもなかつた。

「この病人一人でおれの運がきまらうといふのだ。」

醫者はまた繰り返して腹の中でかう思つた。すると、その一刹那すてきないい考へが電光のやうに頭の中を走つた。

「さうだ。いい思ひ付きだ。きつと治るに相違ない。いよいよおれの運が向いて來たといふものだ。」

醫者は嬉しさうににやにや笑つた。そして病人に手拭てきつく頬冠りをさせて裏口まで連れ出した。背戸には小流が可笑しさに堪らぬやうに笑ひ聲をたてて走つてゐた。醫者は病人をその縁に立たせてかういつた。

「一息にこの溝を飛ぶんだぞ。するとその拍子に頤が箝るからな。」

病人は醫者と小流れとを見くらべて變な顔をしたが、別に何ともいはなかつた。そしてばつたのやうに足を揃へてひよいと一息に溝を飛んだ。

醫者は急いで頬冠りをとらせてみたが、病人は相變らず間の抜けた顔をして涎をくつてゐた。病人はまた頬冠りをさせられた。今度は一段と強く縛られたので、顔は小包のやうに歪んでゐた。醫者はそれを連れて裏の柿の木の下に立たせた。そして澁柿の實が貧血症のやうに青い顔をしてゐるのを見上げながらいつた。

「あすこから飛び下りるんだぞ。するとその拍子にうまく頤が箝まるからな。」

病人は歪んだ顔をして悲しさうに目を瞬いたが、それでもすなほに枝に手をかけて柿の木に登つて行つた。そして呻くやうな聲をしたと思ふと、もうそこから飛び下りて蛙のやうに地面に両手をついてゐた。

醫者は急いで頬冠りをとつて、病人の顔を覗き込んだ。

病人は相變らず涎をたらしてゐたが、顔を火のやうにして何か譯の分らぬことを怒鳴つてゐた。

それからといふものは、醫者の評判は、一さう悪くなつた。氣の毒な老人はこそこそ家を疊んでまた他の村へ引越したさうだ。

老畫家の音曲

洋畫家淺井忠氏の追善が一歳東京の根岸で開かれたことがあつた。その折鈴木鼓村氏が箏を弾いた。鼓村氏が箏を持出してそろそろ爪調べにかかると、そこに居合せた多くの人達の中から、誰だかだしぬけに手を叩いたものがあつた。皆はその方を振り向いた。そこにはNといふ老つた洋畫家が六朝の文字のやうに鱧子張つて控へて居た。N氏は皆の眼が一度に自分の方に注がれると、幾らか氣味が悪かつたかして、傍に居る老年の洋畫家小山正太郎氏の方へ顔を捻向けて言つた。

「小山さん、鈴木君の箏は豫て噂に聞いて居ましたが、實際旨いものですか。」

小山氏も餘り音曲の方は確でなかつたらしく、あやふやに頭を動かしたまま何とも答へな

かつた。

すると、其の直ぐ後にIといふお伽話の作家が控へて居たが、二人の話を聞くときくすくす笑ひ出した。そして後からN氏の肩を叩いた。N氏は四角い顔を後へふり向けた。

「どうしたんだい。」

「どうもしやしないが、君が餘り面白い事を言ふからさ。」N氏が富岡鐵齋、岡田三郎助氏などと一緒に、畫壇の三疊だといふ事を知つて居るI氏は、態々自分の口を相手の耳に押付けて、大きな聲で喚いた。「鈴木君は未だ箏を弾きやしないよ。あれは唯の爪調べぢやないか。」

「さうか。爪調べか。」N氏は何か固いものを一飲みにくつと飲み込んだやうな顔をした。「それにしては爪調べが素敵だね。」

何時だつたか、清朝の光緒皇帝が未だ達者で居た頃、波蘭のあるヴァイオリン弾きが聘ばれて御前演奏をやつたことがあつた。音樂家は幾つか名高い小曲を弾いた。すると皇帝はそのたんに感心したやうに上品な顔を動かしたものだ。曲が終ると、音樂家は皇帝に向つて訊いた。

「陛下、どの曲がお氣に召しましたございます。」

皇帝は卽座に答へられた。

「お前が最初に弾いた曲こそ、世界一の名曲だと思ふ。」
音楽家が最初に弾いたといふのは、それはただの調律で、何の楽曲でもなかつたのである。
めでたしめでたし。

それ猫が

眞言宗御室派では、管長の後任選挙について、高野山の法性着鑲師と浦上隆應師との間に、
かなり激しい對抗運動が持上つて居るらしい。

世の中を超脱した僧侶にしても、やはり小さい庵よりは大きい寺の方が住み心地はいいもの
と見える。

さういふなかに、往時曹洞に風外といふ禪坊主がゐた。どうしたものか、大寺が嫌ひで、老
つてからは大阪の烏鶴樓うじやくろうに引込んで、暢氣のんきに膝小僧を抱いてくらしてゐた。

そこへ、ある時讃岐の高松藩から使の者がやつて來た事があつた。高松の殿様は、自分の領
地が、猫の額ほどしかないので、誰かいい坊さんに會つて、もつと廣い心の世界の話も聽きた
く、おまけに出来る事なら、その坊さんの傳手で、後の世にはもつと祿高の多い土地を配あてが
つて貰ひたく思つてゐたので、かうしてわざわざ使者を立てて、風外を高松に迎へようとしたの
だ。だが、風外はどうしても肯かなかつた。

使者はむき出しに讃岐訛りを出して、風外を口説きにかかつた。殿様の云ひつけを承はつて
來たからには、是が非でも連れて歸りたかつた。風外は泣き出しさうな使者の顔を面白さうに
じつと見入つてゐたが、相手の言葉が一寸途切れると、いきなり下臉したまぶたを押へてあかんべいをし
てみせた。

使者は呆つ氣に取られて歸つて往つた。だが、殿様の前ではまさかにあかんべいの眞似も出
來なかつた。

風外が三河の香積寺に居た頃、ひと夏本山から寺へ使僧が立つた事があつた。その日は蒸暑
かつた。夕方になつて風外は風を納いれようと思つて、團扇を片手に木履はきを穿はいて使僧の休んで
ゐる室の前をぶらぶらしてゐた。

使僧はしたたか者だつた。簾越しに風外の浴衣がけの姿を見ると、黙つては居られなかつ

た。

「猫ぢや、猫ぢやとおつしやいますが、猫が下駄はいて来るものか。」

使僧はそれとなく風外にちよつかいがかつてみた。風外は猫のやうなおとなしい顔立て聞えた男だつた。猫は黙つて下駄をひきずりながら影を隠した。

その翌る日、使僧が寺を發たうとすると、風外は多くの弟子達を山門の兩側に並べて、自分は使僧の後から見送りに出て來た。そして使僧が山門の闕を跨がうとすると、だしぬけに後から大きな聲で、

「それ猫が……」

と怒鳴つた。使僧はびつくりして後をふり向いた。そこには猫は居なかつたが、猫によく肖た禪坊主がからからと笑つてゐた。使僧は鼠のやうに小さくなつて逃げた。

演説家の妻

佛蘭西自然派の文豪フロウベエルは、自分の作物が出來ると、きつと召使の婆やに讀んで聞かせたものだ。そして婆やが了解のみにめないやうな所があると、すぐそれをもつと解りやすい文句に書き直したものださうだ。

伶俐な婆やが宅に居ないものは、據なく女房にでも讀んで聞かせなければなるまいが、多くの場合文學者の女房は、言ひ合せたやうに、自分の良人の書いたものに餘り價値を置いてゐない。ひどいになると、自分の良人の書いた作物の名前すら知らないものがある。もしか小説家の中で、自分の女房を愛讀者の中に數へる事が出來る人があつたなら、氣の毒な事には、その人は極めて下手な作家と言はなければなるまい。

演説家の女房の中には、わざわざ演説會場まで出掛けて行つて、自分の良人が蟹のやうに手をふりあげて大聲に喚き散らしてゐるのに聴き惚れてゐる者がある。演説といふものは、餘り

賢い人のするものでないし、餘り賢い人の聴くものでもないしするから、女房かないが聴いたつて、猫が聴いたつて、少しも差支ないかも知れない。

英吉利のヂスレエリイは、聞えた演説家だったが、議會で大演説でもしようといふ日には、きつと夫人を傍聴席に送り込んだものだ、ある時議會で何かの演説をするといふので、いつものやうに夫人と一緒に馬車に乗込んだ事があつた。

いいお天氣の日で、乾いた路を馬は元氣よく走つた。夫人は外の空氣に觸れようと思つて、窓硝子に手をかけたが、どうした機みか、間違つて窓枠に指先を挟まれてしまつた。

夫人は痛くて堪らなかつたので涙ぐんだ眼で良人の方を振りかへつた。ヂスレエリイは傍に女房のゐる事すら忘れたものやうに、黙つて何か考へ込んでゐた。

「あ、いけない、いけない。演説の仕組を考へていらしやるんだわ」夫人は腹の中で考へた。「折角の演説を邪魔立しては大變だわ。」

夫人は良人の氣を紛れさすまいとして、拗ちぢれるほど痛い指先をもじつと辛抱してゐた。もしか指先の代りに首根つこを押へつけられてゐても、夫人は屹度辛抱してゐたに相違なかつた。

馬車は議會の玄關に着いた。自分の女房の指先が、窓枠に嚙かれてゐると氣附いた英吉利の大

政治家は、キャベツのやうに青白くなつた。やつと引き出された夫人の指は、紫ばんでひしやげてゐた。大政治家は英吉利帝國が捻ね麵めんのやうになつたと思つた。

洒落た料理

料理ほど大切なものはない。オスカア・ワイルドだつたか、「朝飯を旨くさへ食はして呉れたら、まあ大抵の事は辛抱しておくさ」と言つたが、實際食事を旨く食はして呉れたら、その他の事は知らぬ顔をして見過してもいい。

京都の八新が料理で名高かつた頃、(惜しい事には今はそれ程ではない。)或る夏の事、主人が夜のしらじら明けに表戸を開けにかかると、その折丁度表通りを通りかかつてゐたお爺さんが、ひよつくり小鳥のやうに中へ飛び込んで來た。主人は驚いて理由を訊いた。

「私は京見物に參つた丹波の者で御座いますが……」

お爺さんは叮嚀な口上で挨拶した。その言ふ事を聞くと、お爺さんは田舎に居る時から、この店の板前の評判を聞いてゐたので、京見物に來たのを仕合せに何かな二品三品見つくらつたもので食べさせて貰ひたいと言ふのだつた。

「これはほんの僅ですが：：」と言つてお爺さんは財布から十圓紙幣を一枚取り出して主人の掌面においた。

「胡散臭い爺やな。」と八新の主人は睨んだ。よく見ると、爺さんにはどこに一つ丹波のものらしい所がなかつた。衣服の着こなしといひ、態度といひ、氣が利いてゐて、誰が見ても中京邊の物持の御隠居の洒落者に相違なかつた。

「てつきり悪戯しに來よつたのやな。」と主人はすぐに相手を見ぬいた。さういふ事なら此方にも考へがないでもなかつた。主人は相手を言ふがままに丹波の田舎者としてもてなした。そして朝飯の出来る間、暫らく休んでゐて欲しいと、お爺さんを小間に通して待たせておいた。

主人はすぐに得意先の大阪の漬物問屋に電話をかけた。そして西瓜の奈良漬の飛切りなのを大急ぎに態人で京都の店まで届けて貰ふやうに頼んだ。店の若い者の一人は自轉車で宇治橋まで走らされた。名高い三の間の水を汲んで來させようといふのだ。

三の間の水といふのは、竹生島の辨財天の社壇の下から流れ出ると言ひ傳へられた美しい水で、往時秀吉が伏見に居た頃には、茶を立てるといつては、いつもこの水を汲ましたものだつた。

水の味といつては、また格別のもので、京都には茶人が多かつた故で、水自慢の古い井戸が未だに方々に残つてゐる。京役者の隨一人阪田藤十郎は、江戸興行に行く時、江戸の水は不味くて、とても咽喉を越さないからと言つて、わざわざ京の水を樽詰にしたのを、幾つか荷駄馬に乗せて海道筋を下つて行つたといふ事だ。

暫らくすると、三の間の水もついた。大阪の漬物も着いた。八新の主人は三の間の水で茶を煎じて、漬物を菜に茶漬を出した。

「ほんの有合せものでお口に召すかどうか知りまへんが：：」

お爺さんは一口一口噛みしめるやうにして茶漬を食べた。そして三杯目の茶碗を惜さうに膳の上におくと、感心したやうに首を捻つた。

「いや、すつかり嚙通りで、まったく恐れ入りました。」

爺さんは叮嚀にお辭儀をして玄關を出た。その後姿が見えなくなると、主人は片手をぐつと



握りしめて、今のお客を突き飛ばしてもするやうに前へ出した。
「へつ、どんなもんやい。態あ見やがれ。」

ナポレオンの人差指

大和薬師寺の境内から発見されて、國寶の一つとなつてゐる吉祥天女の繪像は、今では日本の美術史の上で、なくてはならない代表作となつてゐるが、あの天女の指は、不思議なことに右左とも六本づつある。ある人は、あの繪について、あれは當時の高貴の人をモデルにとり、その人が指が六本あつた所から、あの天女も六本指に描かれたといふやうなことはなからうかといつてゐるが、どうかするとそんな理由から指が一本づつ多くなつてゐるのかも知れない。

指といへば、トルストイの書いた「戦争と平和」によると、大ナポレオンの手は皮膚が柔らかで、色白で、いつも天瓜粉の匂ひがぶん／＼してゐたさうだ。そして指の節々が女のそれの

やうにふつくりして、拵りがはひつてゐたさうだ。あのすばらしい英雄が、かうした娘つ子のやうな指を持つてゐたかと思ふと、一寸をかしくなるが、それよりも不思議なのは、あの人の人さし指は中指よりもいくらか長かつたといふことである。人さし指が中指より長い人は稀にあるが、その中で萬人にすぐれた男は、ナポレオンの外には先づないといつていい。

今一つ指といへば、徳川時代の名高い國學者上田秋成は、子供の時^{ほうそう}癩瘡を患つたとかで、右手の中指が小指よりも短く、また左手の人さし指も丁度同じ位の長さで、とても指の働きはしなかつたといふことだ。

こんなわけで、小さい時から不具者扱ひにせられて、書などあまり習はなかつたものだが、それでも晩年になると、心まかせに書いたのが面白いといつて、好き者の間にもかなりもて囃されたものだ。すると自分でもついその氣になつて、いつばしの書家氣取りに、随分揮毫をもすれば、また人の頼みに應じて、自分の著作の中で刊行にならない書物を筆寫して、そのお禮で生計の途を立てたこともあるといふことだ。

佛國小説と米國

佛蘭西のアルフオンス・ドオデエがその傑作「サツフオ」で文壇に乗り出して、一足飛びに大家になつた時のことである。紐育の書屋でふだん宗教物ばかり出版して居る店が、歐羅巴のいろんな國から、その代表的作家の代表的作物を選んで何々叢書といったやうな小説集を出版しようともくろんだものだ。そして佛蘭西からはその代表作家としてドオデエが選ばれた。

ドオデエから送つてよこしたのは、丁度そのころ出版したばかりの「サツフオ」であつた。本屋はその翻譯をかねて昵懇のある物堅い牧師さんに頼んだ。牧師さんはそんな風な書物を讀むのは多分初めてであるらしかつた。讀んでみると、男と女のみだらなことがちよいちよい書いてあつたのでびつくりした。で、早速本屋に駈つけて来て、こんな書物を翻譯したら、アメリカ中は今に果物のやうに腐敗してしまふと、顔色をちがへて意見立てをしたものだ。本屋はすぐに原作者宛てに電報を打つことにした。

電報が巴里に着いた時には、ドオデエは先輩や友達と一しよにある料理屋で御馳走を食べてゐた。一座の顔觸れは、ヴィクトル・ユウゴウ、そのお弟子で始終赤いシャツを着て、佛蘭西のロマンチストは自分で御座ると言つた風に、胸をそらして巴里の町を濶歩してゐたテオフィユ・ゴオテエ、それからそのころずつと巴里に滞在してゐた露西亞のツルゲネエフといつたやうな人達だつた。その人達は、その日もドオデエの新作を褒めそやしてばかりゐた。そこへ使が持つて來たのが、紐育の本屋からの電報だつた。「サツフオ」の作者は胸を躍らしながら封を切つた。なかには、

“Sapho Objectionable”

といふ言葉があつた。思ひ上つてゐたドオデエには、第二の言葉の意味がどうしても解らなかつたので、變な顔をして電報をそのまま卓子デブの上に放り出した。皆はどれどれと覗きこむやうにして電報の文字を拾つた。アメリカの小うるさい道德的標準など、少しも氣にかけてゐない歐羅巴の小説家には、何のことやら皆目解らなかつた。飲みさしの葡萄酒のコップを手につつまま仔細らしい顔をして、ぢつと考へこんでゐたツルゲネエフは、暫らくすると

「ああ、やつと解つたよ。」

といつて、ドオデエの顔を見た。その説明によると、これは多分發信人が佛蘭西語と英語とを
ごつちやに使つたからだといふのだ。なるほどさう聞けばそんなやうな氣もした。で、早速紐
育の本屋宛に電報を打つことに決めた。電報の文字は
「モツトワカリヤスクツヅレ」
といふのだ。電報を出してしまふと、
「どうもアメリカの田舎つべえには困つちまふ。」
といひいひ、みなは旨さうに葱のにはひのする料理を食べ出した。

大雅と錦の袋

近頃考古學の知識が一般に弘まるにつけて、古い民族の遺蹟だと言ひ傳へられた地方へ往く
と、物ずきな蒐集家が鶴の目鷹の目で、石器の破片か何かを嗅ぎまはつてゐるのをよく見かけ
る。

池大雅は風景畫家だけに、よく方々を旅行しまはつたものだが、到るところで珍しい瓦だと
か、石だとかを拾つて歸るのを忘れなかつた。ある時奥州へ往つて、勿來の關址を訪ねた事が
あつた。その折も大雅は京に残しておいた女房の事などは、すつかり忘れてしまつて、珍しい
瓦を捜さうとして雑草の生へ繁つたなかを這ひまはつてゐた。

大雅は學者や藝術家によくある「忘我」の境地にすぐ入れる畫家で、面白い話をするか、い
い景色を見るかすれば、その瞬間は借金や女房のある事も、すつかり忘れる事の出来る程調法
な心をもつてゐた。ある時遠國に旅立ちをしうとして家を出た事があつた。そのあとで妻の
玉瀾は、大雅が生命よりも大事な筆を忘れてゐるのに氣がついたので、それを持つてすぐにあ
とを追ひかけた。そして忘れ物だと言つて筆を手渡しすると、大雅は鄭重に頭を下げた。

「どなたかは存じませんが、御親切に有りがたう存じます。」
家を出て、道の五六町も來ぬうちに、この不思議な畫家は、もう女房の事など忘れてゐたの
だ。

大雅は草のなかの窪地で、やつと古瓦を見つける事が出來た。で、叮嚀に土を拂ひ落して、
持つて來た錦の袋にそれを納めて首にかけた。

そぼろな、旅囊れのした姿をした旅人が、美しい錦の袋を大事さうに胸に下げてゐるので、胡麻の蠅が二人すぐ後に附いた。

大雅がある茶店に憩ふと、胡麻の蠅二人も同じやうにそこへ来て腰をおろした。そしてじろじろ横眼でこの畫家の素振を見てはひそひそ話をしてみたが、その一人はだしぬけに大雅に話しかけた。

「旦那、旦那はどこまでお出かけてござんすね。」

「私か。」大雅は馬に話しかけられたやうに怪げんさうな顔をした。「私の旅はどこといふあては無いのだ。」

「へえ、可笑しな旅ですな。」胡麻の蠅は鬚の伸びかかつた頤に冷やかな笑ひを浮べた。「それにしては御心配でせう。そんなに大金をお持ちでは。」

「大金を？ 私は大金など持つては居ないが……」

大雅は大金があつたら、是非購ひたいものの幾つかを腹のなかで考へながら、相手の顔を不思議さうに見た。二人とも變な顔をしてゐるが、それでも大雅がよく描いてゐるやうな變な顔よりは幾らかましであつた。

「旦那、白つばくれちやいけませんぜ。」今一人の胡麻の蠅はぞんざいな口をきいた。「金でなくて、その錦の袋には何が入つてゐるんだね。」

「ああ、これかい。」と大雅はやつと胸の袋に氣がついた。皮肉な笑ひを口もとに浮べながらそろそろそれを開けにかかつた。胡麻の蠅二人は眼を光らした。大雅は中から古瓦を引張り出した。「お前さん達も、こんな物がお好きだと見えるな、これは勿來の關の古瓦だが……」

胡麻の蠅は呆氣にとられた。そして古瓦を金と見ちがへた自分達の眼利を恥ぢて、もつと修業しなければならぬと思つた。修業だ。修業だ。修業は大雅にとつても、胡麻の蠅にとつても、同じやうにいい事である。

美術家と驛長

ウキリアム・チエエスといへば、長らく米國の美術協會の會頭を勤めてゐた、テイントレットの研究家として名高い肖像畫家である。一體米國には、自分の肖像をいつまでも油繪に描き

残しておきたい自惚と、書かきに仕拂ふ謝禮とを、どちらともどつさり持ち合はせてゐる男が多いので、肖像畫の店を張つてゐる畫師も少くはないが、今いふチエエスはそのないかさまなのとは粒の異つた歴とした藝術家である。

チエエスは先年日本に遊びに來た事があつた。その折の事、この書かきはある停車場で（この停車場だつたか、書かきははつきりと其名を覚えてゐない。一體書かきといふものは餘り物覚えがよくないやうだ。）汽車を待つ間のつれづれに雲を見てゐた。

汽車を待つ間の退屈しにぎには、待合に素晴らしい顔でもあつたら、夫を見てゐるのに越した事はないが、そんな顔がなかつたら、雲でも見てゐるよか仕方があるまい。その日は雲が美しくあつた。チエエスは、プラットフォームに立つたまま、いつまでもその方に氣を取られてゐた。

そこへだしぬけに貨車がごとごとと入つて來た。そしてチエエスの立つてゐる直ぐ前で停まつたので、美しい雲は見られなくなつた。藝術家はちよつと舌打ちして外へ歩み去らうとした。

すると、目の前に驛長の制服を被た一人の男が立つてゐた。驛長は叮嚀にお辭儀をした。

「あなたは唯今まで雲を御覽になつてゐましたか。」

「見てゐました。」藝術家は、ぶつきら棒に答へた。

「何だつて、そんなに雲を御覽になりますか。」

驛長は自分の女房のだらしない寢顔でものぞ視かれたやうに、カミ胡散さうな眼つきをして言つた。

「私は藝術家です。」アメリカ製の藝術家は、きつぱりと言つた。藝術家だつたら、雲を見ようと、動物園を見ようと、動物園よりはもつと凄じい驛長の女房の寢顔を見ようと、一向掛け構ひがないといったやうな物の言ひ方だつた。

「藝術家でいらつしやる。すると貴方の前に貨車を引込んだのは、以ての外の失禮でした。」

驛長は前よりは一層叮嚀にお辭儀をして、小走りに彼方へ往つたかと思ふと、暫らくすると、貨車はまたごとごとと音を立てて、後退りを始めた。

藝術家は呆氣にとられた。そして世の中には親切な驛長もあるものだと思つた。——どこの驛で、何といふ驛長か、チエエスがこの二つの名を書き落してゐるのは重ね重ね残り惜しい。

詩人を追出せ

むかし英吉利にスペンサアといふ名高い詩人があつた。この人一代の傑作に「仙姫」フェアリークイーンといふ長篇の詩があるが、この詩の出来上つた時、スペンサアは誰よりも先きに自分の保護者に見せなければなるまいと思つた。保護者といふのは、その頃の社交界に利け者のサウザンプトン伯爵だつた。

詩人は早速伯爵の支關を訪れた。そして執事を通じてその嵩高な原稿を伯爵の手もとまでさし出した。伯爵はその折椅子にもたれてぼかんとしてゐたらしかつた。で、原稿を受取ると、その場ですぐに読み出したが、詩があまりよく出来てゐるので、急に居ずまるを直しながら、執事を喚んだ。

「スペンサアはどうした、まだ居るか。」

「はい。あちらでお待ちでございます。」

「さうか、うい奴だ。この詩はなかなかうまく出来てゐるわい。褒美として二十磅ポンドばかり取らすがいぞ。」

「畏まりました。」

執事は叮嚀に頭を下げてさがつて往つた。

伯爵は息も繼がずにその後を讀みつづけた。そして馬のやうに幾度か鼻を鳴らしてゐたが、暫くするとまた執事を喚び入れた。

「スペンサアはどうした、まだ居るだらうな。」

「はい、あちらでお待ちでございます。」

「さうか、うい奴だ。褒美としてもう二十磅取らすがいぞ。」

執事は黙つて出て往つた。

伯爵は夢中になつてまた讀み入つた。暫くすると執事は三度喚び立てられた。

「スペンサアはどうした、まだ居るだらうな。」

「はい、あちらでお待ちでございます。」

「さうか、褒美としてもう二十磅取らすがいぞ。」

執事は腑に落ちなささうな顔をして出て往つた。

詩は讀みつげばつぐ程面白くなつた。伯爵はたうとう鐵瓶のやうに痲癩かんしやくを起して原稿を卓の上に投げつけた。そして大聲で執事を喚び立てた。

「スペンサア奴、怪しからん奴ぢや。早く邸から追ひ立ててしまふがよい。もつと讀んで往つたら、乃公は身代限りをせざあなるまい。」

芽 張 柳

洋畫家K氏は牛のやうにのつそりしてゐて、おまけに牛のやうに色が黒いので聞えた男である。

ある時K氏は他から芽張り柳の畫を頼まれた事があつた。

「芽ばり柳——といふと、芽を吹き出した柳ですな。よろしい、あまりお急ぎでなかつたら描いてあげませう。」

氏はゆつくりした調子で返事をした。そして客が歸つた後で、何氣なく縁側へ出て見ると、梅がちらほら咲きかけてゐるのに氣がついた。

K氏は考へた。梅が咲くからには鶯うぐいすも来るに相違ない、鶯が来るからには、燕だつて來ない筈はなからう。してみると柳もそろそろ芽を張つてゐるかも知れない。

「さうだ、柳も芽を吹いてゐるかも知れないぞ。」

K氏はいつに似げなく慌てて、賀茂川の川つ縁に出てみた。

案に違たがはず、柳はそれぞれ芽をふいて、春の支度に忙しさうだつた。實際畫家にとつてこんな不都合な法はなかつた。芽を出すなら出すで、一應畫家に下相談をしてからにしたつて、遅くはなかりさうなものだ。

身勝手なのは、唯それだけではなかつた。そこらに立つてゐる柳といふ柳の恰好は、どれもこれもK氏の氣に入らなかつた。あるものは後期印象派の若い洋畫家のやうに、K氏の方に尻を向けて衝立つてゐた。またあるものは未來派のやうに頤おとがひを突き出して、この畫家に喧嘩腰でゐた。

「どうもいかん、みんな形が畫になつてゐない。」

K氏はぶつぶつ呟きながら川つ端を下つて來ると、漸と二三本舞妓のやうな恰好をしたのが見つかった。

「うむ、これならよかりさうだ。」

K氏は早速繪具箱をあけて寫生にかかった。

K氏は毎日柳ばかりを寫生してゐるわけにも往かなかつた。畫家にも色々俗な用事はあるものだ。K氏は精々閑をこさへては、川つ端へ出掛けて往つたが、格別急がうともしないで、のつそりとしてゐるので、其畫が出来上つたのは、寫生を始めてから恰度三十日ばかり經つてゐる頃だつた。

註文主は畫家の手から其油畫を受取つたが、ちらと畫面を見ると、其儘黙つて押もどした。

「先生私がお頼みしましたのは、芽張柳の畫としたな。」

「さうです、確に芽張柳でしたよ。」

「でも、先生、この畫は芽張柳やなうて、青柳どすな。」

K氏は吃驚して自分の畫を覗き込んだ。成程柳はこんもりと葉が繁つてゐた。K氏が寫生にひまどつてゐる間に、柳の方では又しても畫家に相談なして、勝手に葉を伸ばしてゐたのだつた。

奇 癖

小説家のH氏は今は何うか知らないが、以前もつと若かつた頃には、他家へ訪ねて往つての歸りに、門口の戸をがらつと開けて表へ出ると、その儘さつさと歸つて往つたもので、決してその戸を閉めておくやうな手數のかかる事はしなかつた。

「何だつて君は門口の戸を締めないんだね。」

それを氣にして友達の一人が、ある時不思議さうに訊いた事があつた。すると、H氏は答へた。

「門口の戸かい。あれは僕が出入するのに、開けなければならぬから開けはするが、締める必要なんかちつとも無いぢやないか。」

むかし英吉利にH氏と同じ様な皮肉家にスキフトといふ男があつた。家事一切は女中まかせ

て何一つ口を出さうとしなかつたが、唯一つの癖は戸の開閉がおそろしく口やかましい事で、どんな場合にも、これだけは嚴重にしないと、直ぐに機嫌を悪くした。

ある時、女中の一人が、かなり遠い田舎町にゐる姉が結婚するので、是非その席へ顔出ししなければならぬから、一日だけお暇が許して貰ひたいと言ひ出した。主人のスキフトはすぐに承知した。

「それはめでたいの。ゆつくり往つて来るがいい。幸ひ乃公の馬もあいてるから、あれに乗つて往くとしたらどうぢや。馬丁に案内して貰つての。」

「え、あの馬をお貸し下さいますか、それに馬丁さんまで……まあ、旦那様お有りがたうございます。」

女中は身體を折釘のやうにしてお辭儀をしたが、その儘主人の室を飛び出して、直に支度に懸つた。

馬の用意は出来た。女中は主人の背に跨がつたやうな氣持で馬に乗つた。そして途々何といふ親切な旦那様だらう、こんな好い方ならいつそ結婚してあげてもいいと思つてゐるらしい。

暫くすると、遙か後から呼びかけて来るものがあつた。女中も馬丁も馬も一緒にあとを振りかへつた。追ひかけて来たのは下男の一人で、旦那様の御用だから今一度邸へ歸つてくれといふのだ。女中はぶつぶつ呟きながら歸つて来た。そして膨れつ面をして、主人の室へ入ると、スキフトはじろりと横目でにらんだ。

「その戸を締めて行きなさい。」

女中は馬に乗つて結婚式に出かけられる嬉しさに、つい戸をしめるのを忘れてゐたのだ。

無學なお月様

N氏は奈良女子——の校長である。東京にゐる頃にはさうも思はなかつたが、住んでみると奈良は景色がよく、景色がよくないところには古蹟があつて、遊ぶには恰好な土地だなどN氏は思つた。それにつけて、かういふ結構な土地に来て、鹿のやうに柔和で、鹿のやうに尻つ尾の短い女學生を預つてゐる自分の身の幸福さを思ふらしかつた。

N氏は晩餐がすむと、毎晩のやうに奈良公園へ散歩に出た。ある晩の事、いつものやうに女子教育の事を考へながら（ニイチエだつたか、女をしつけるには鞭を忘れなと言つたが、N氏は鞭らしいものを持つてゐなかつた。多分忘れてゐたのに相違ない。）公園のなかをぶらぶらしてゐた。すると、いつの間にか黛くろずんだ春日の杜もりに、のつそりと大きな月があがつてゐた。

「や、月が出てゐる。ちやうど十五夜だな。」

と、立ちとまつて珈琲皿のやうにまん圓く、おまけに珈琲皿のやうに冷たいお月様を見てゐるうち、N氏は何だか歌よみらしい氣になつた。

「天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出てし月かも」

いい歌だ、いい歌が出来たものだと思つて、今一度よみかへしてみると、夫は自分の歌ではなく、百人一首に出てゐる名高い安部仲鷹あべのなかたかの作だつた。

N氏はその歌を繰りかへしながら、じつと空を見てゐると、肝腎の珈琲皿のやうなお月様が三笠の山の上に出てゐない事に氣がついた。

「をかしいね。三笠の山に出てし月かもといふからには、ちやんと三笠山のでつぺんに出なけ

ればならん筈ぢやないか。それにあんな方角から出るなんて。」

實際N氏の立つてゐる所から見ると、月は飛んでもない方角から出てゐた。三笠山は何か後暗い事でもしたやうに、黛くろずんだ春日の杜影に圓い頭を窄すぼめて引つこんでゐた。

夫から後といふもの、N氏は公園をぶらつく度に方々から、頻りと月の出を調べて見たが、無學なお月様は、仲鷹の歌などに頓着なく、いつも外つ方から珈琲皿のやうな圓い顔によつきりと覗のぞけた。

「やつぱり間違だ。仲鷹め、いい加減な茶羅つぽこを言つたのだな。」

N氏は自分のやうな眼はしの利く批評家に出會つたら、仲鷹もみじめなものだと思つて得意さうに微笑した。そして會ふ人ごとに夫を話した。すると大抵の人は

「なる程な。」

と言つて感心したやうに首を傾げた。

N氏に教へる。それは月が年が寄つたので、月も年がよると變な事になるものなのだ。

詩人と百姓婆さん

ヘンリー・ヴァン・ダイク氏といへば亞米利加では、第一流の學者として、詩人として聞えて居る老人である。去年だつたか娘をつれて日本へ遊びに来たが、其の節日光を見た詩を本誌へ寄稿した事があつた。詩はとり立てていふ程の立派な出来ではなかつたが、それでも亞米利加人の詩としては巧いと思つた。

その時は丁度、同じ亞米利加から、實業家のヴァンダリツプ氏一行が来て、盛に日本人に歓迎されて居た時なので、ヴァン・ダイク氏の事は一向世間の噂に上らなかつた。世間の噂に上らなかつたからといつて、馬鹿にするものではない。むかし政治家のグラッドストオンと詩人のテニスンとが連立つて、オックスフォード大學かどこかに講演に行つた事があつた。その折グラッドストオンは、聴衆に向つて、自分の政治家としての仕事は派手なやうだが、すぐ世間からは忘れられる。テニスンの事業は地味だが、永久に残るといつたものだ。グラッドストオ

ンめ、煙草好きで、正直者で通つたこの詩人に、一寸お世辭をいつたのだらうが、それにしてもこのお世辭には眞理がある、(尤も永久に残るといつたところで、唯残るといふだけでは、案外詰らないかも知れない。)

このヴァン・ダイク氏が、或る時南の方へ旅行した事があつた。その折この詩人は汚い百姓家の入口に、老つた一人の印度人の婆さんが、だらしなく躑躅しほがんで、薄汚い粘土製のパイプを啣はへて、すばすば煙草を吹かして居るのを見た。

「婆さん、お前煙草が大層好きだと見えるな。」ヴァン・ダイク氏はにこにこ笑顔を作つて肩越しに婆さんを覗き込んだ。「だがそのパイプは少し汚過ぎるやうだな。」

婆さんは皺はくちやな顔を上げて詩人を見た。

「旦那、汚ないといはつしやりますか。その筈だての、俺ら日がな一日すばすばやつてるのだからな。」

婆さんの息は詩人にとつて堪へられない程煙草臭かつた。詩人は顔をしかめ乍らいつた。

「そんなに煙草が好きなのかい。だが、パイプだけはよく掃除しなくちや。さもないと口が臭くつていけない。」

「口が臭くたつて構はねえだ。」

婆さんは不機嫌さうに鶏のやうに口を尖らした。

「でもさ、」詩人はお愛想ぶりに婆さんの肩を叩いた。「死んで天国へ行くのに、息が臭くては困るぢやないか。」

「何をいはつしやるだ。」婆さんはてんで相手にしないやうにせせら笑つた。「俺ら死ぬる時には息を引取りますだての。」

ヴァン・ダイク氏は何とも返事のしようがなかつた。で、ステツキを振つて婆さんの傍を去つた。すべて負けた時には成るべくその場を外した方が結構である。

蛇

春が暖くなるにつれて、蛇がそろそろ穴から這ひ出すやうになつた。今日は一つその蛇の失敗ばなしをここに披露する。

京都の某畫伯の數多い門弟のなかで、誰の眼にも一番光つて見える人にK氏といふのがある。K氏は實際えらい、畫も上手に描くのみならず、他の人が二本の脚でする旅行をも、氏は平氣で一本脚でするからである。

K氏は子供の時から足が悪かつた。で、坐つてゐて出来る仕事は無からうかと思ひついたのが繪の道である。もしか性來脚うまれつきあしが達者だつたら、氏は畫かきになぞならなかつたかも知れなかつた。だが、繪の方がだん／＼巧くなつて來ると、氏は多くの畫かきのする寫生旅行といふものが仕てみたくなつた。それには悪い脚が邪魔になつた。で、氏は思ひきりよく、その悪い方の脚を一本切つて捨てた。——世間には他人ひとのものだつたら、手だらうが、脚だらうが、平氣で切つて捨てる醫者といふ職業人がゐる。

去年の事だつた。K氏は義足をつけて、同門の人達と一緒に日本アルプスへ寫生旅行に立つた。いよいよ山にかかると、仲間は足弱のK氏に構つてゐなかつた。彼等は山へ寫生に來たのである。もつと眞實の事をいふと、文展向きの繪になる景色を搜しに來たのである。だが、困つた事には神様が山をお拵こしらへへになつた時には、まだ文展といふものが無かつたので、山にはそんな用意はすつかり缺けてゐた。で、畫かき達はK氏を置いてきぼりにしてぐんぐん奥へ入つ

て往つた。恰度文展でいつもK氏に置いてきぼりを喰はされたやうに。K氏は義足を曳きずりながら、よちよち後から登つて往つた。うしろには強力がついてゐた。ごろた石の多い岨道へ來ると、熊笹のかげからいきなり飛出して來たものがある。あつと言ふ間にK氏の片足へ噛みついて、そのまま電光のやうに消えてしまつた。「や、蝮だ。且那やられましたな。」強力は顔色を變へて飛んで來た。「早く手當をなさらないれば……」

「なに、構はない。」K氏は平氣で歩みを續けた。「馬鹿な蝮だよ、俺の身體が不死身だつてえ事にちつとも氣がつかないんだね。」

「でも、且那、相手は蝮ですからね。」強力は胡散さうな眼をして、後から氣をつけて畫かきの容子を見てゐたが、畫かきの脚は少しも痺れたらしい風は見えなかつた。

蝮の馬鹿め、つい見さかひもなくK氏の義足の方へ噛みついたのだつた。

王様と上布

伊太利の王イマニエールがある時、旅の途すがら名もない田舎町に泊つた事があつた。町の人には名高い王様のお成りだといふので、態々心をこめてとんちんかんなおもてなしをして、王様の御機嫌をとつた。

まづい食事がすむと、王様は眠るより外に仕方がなかつた。王様は寢床にはひつた。寢床は粗末な拵へだつたが、上布だけは新しい、おろしたての雪のやうに眞白な布だつた。王様は木の片か何ぞのやうに無雜作に、そのなかに身體を横へた。

王様は幾度か寢がへりを打つた。寢ぐるしい晩で、王様は國の事や、皇后の事や、馬の事などを考へるともなく考へた。皇后が馬のやうに尻尾をふつたり、馬が一錢銅貨のやうに平べつたくなつたりしたかと思ふと、やがて何事も判らなくなつた。王様は漸と寢つく事が出來たのだ。すると、だしぬけに室の入口の扉をとんと叩く音がした。

イマニユエル王は子供のやうに睡さうな顔を、半分ばかり寢床から持ち上げて見た。入つて来たのは宿の亭主で、胸には折目のついた清潔な上布を大事さうに抱へてゐた。

「王様、お邪魔をして相すみませんが、一寸上布を取り替へさせていたきたいと存じます。」

亭主は鄭寧にお辭儀をした。

「上布か。上布だと新しいやうだが……」

王様は重い臉をこすりこすり、やつとこさで寢床から起きた。亭主は手ばやく上布を敷きかへて往つた。

王様は轉げ込むやうにその上に横になつた。そして毀れた玩具のやうにだらしく手足を投げ出したと思ふと、そのまま、また射をかき出した。

物の一時間も経つと、王様は室の扉がまたんと鳴つてゐるので目がさめた。

暫くすると以前のやうに眞白な上布を胸に抱へた亭主が、幽霊のやうに足音も立てないで、そつと入つて来た。

「王様、毎度恐れ入りますが、また上布を取り替へさせていただき度いと存じまして。」

「上布だと、やつと今取替へたばかりぢやないか。」

王様はふくれ面をして呟いた。

「でも、汚れてゐては失禮でございますから。」

亭主は王様が起き上ると、手早く上布を取かへた。

「何だつて、そんなに度々上布を取り替へるんだね。」

王様は幾らか不機嫌らしく訊いた。

「でも、この邊の下世話に、上布は自分のためには七日目に、お友達にはその日その日と言ひますから、王様には一時間ごとに取かへなくつちやと存じまして。」

名 挨 拶 二 つ

アメリカの上院議員の某が、女房を連れてバルチモアへ遊びに出かけた事があつた。女房は名高い女權論者だつたから、いくら自分の亭主だつて、「連れて」と云はれると、膨れ面をす

るかも知れないから、そんな折の爲めに「一緒に行つた」と云ひ直して置く事にする。

二人は日が暮れて、ワシントン市に歸つて來た。家に着くと、女房は何か忘れ物でもしたらしく、そこらを探そうと捜しまはつてゐたが、急に主人の方へふり向いて訊いた。

「あなた、わたしの蝙蝠傘はどうなすつたの。」

「蝙蝠傘？知らないよ、そんな物。」と主人は蝙蝠傘といふ物の存在を知らないやうな調子で云つた。

「まあ、驚いた。さつき汽車の中であなたにお渡ししたぢやないの。」

「さうさう、そんな事があつたつけないあ。」と、主人は獨立戦争時分の事でも思ひ出すをりのやうに、額に手をあてがつた。「なる程蝙蝠傘は確に俺があづかつたよ。」

「ぢや、どうなすつたの。」

主人は上着を脱ぎさしたまま考へ込んだ。

「困つたな、して見ると、汽車の中へ忘れたかも知れないぞ。」

「まあ、汽車の中へ。」女房は蠅のやうに肩を聳やかした。

「どうもさうらしいよ。」

「よくそんな事が云へますね。」と女は大聲でわめき出した。「あなたは上院議員ぢやなくつて。婦人の蝙蝠傘一つ始末が出来ないものが、よく國政が料理して往けますね。」

主人は斯うきめつけられて、ぐうの音も出ず、失くなつた蝙蝠傘のやうに、眞つ直に衝つ立つてぶるぶる顫へて居た。

クレオパトラやマクベス夫人に扮して名を賣つた英吉利の女優ラングトリ夫人が、まだ若盛りの頃ある宴會で、其の頃ちやうど倫敦を訪れて來た阿弗利加の或る王様と一緒になつた事があつた。

女優は燒栗のやうに色の黒い王様の御機嫌を取らうとして、いろんな愛嬌を振撒いた。王様はすつかり上機嫌になつて、にこにこしてゐたが、歸り際に大きな手を出して眞珠のやうな可愛らしい女優の手を握つた。そして精一杯のお愛想をぶちまけた。

「夫人、もしか貴女のお顔の色がもつと黒くて、そしてもつと肥えて居らつしたら、私あなたの爲めに自分の國をも投げ出すんですがね。」

世界一の名醫

北京に住んでゐる或る亞米利加人が、支那人を相手に、

「お國も悪くはないが、唯病氣の時だけには困つちまふ、信用の出来るいいお醫者がゐませんからね。」

茶話全集

と、しみじみ閉口したやうにこぼした事があつた。すると支那人はむきになつて雀のやうに唇を尖らせた。

「いいお醫者ですつて。いい醫者なら支那に無い事はありません。恐らく世界ぢゆうで、一番いい醫者が居るのは支那でせう。韓璋^{ハンチャン}つて、あなたも御存じでせう。那の人なぞもいいお醫者の一人ですよ。私には生命の恩人ですからね。」

「ほう、生命の恩人だと仰有るか。」件の亞米利加人は、支那に生命といふものが唯の一つでもあるのを、そのまた生命を弄らうといふお醫者があるのを不思議でならないやうに言つた。

「見立てでも上手なんですかい。」

「いや、理由をいふと恚うなんです。いつだつたか私がひどく加減を悪くした事がありましたね。」支那人は歴史家のやうに眞面目くさつて話し出した。「私は早速懇意の洪庚^{ホンコウ}といふ醫者を迎へにやりました。洪さんは藥をくれました。私はそれを飲むと、加減がなほ悪くなりました。で宋森^{ソンシム}といふ外の醫者をまた喚びました。宋さんはもつとどつさり藥の分量を飲ませましたが、病氣は悪くなる一方で、私はもうこれが自分の最後だとあきらめました。で、駄目だと思ひましたが、その韓璋^{ハンチャン}さんを招んで貰ひました。韓さんはそんなだつたら乃公が往つても、もう駄目だらうからつて、來てはくれませんでした。お蔭で私は生命拾ひをしました。」

「なるほど、名醫だ、名醫だ、これが名醫でなくつて何だらう。」と亞米利加人は泣き出しさうな顔をして笑ひつづけた。

書肆と作家

米國のカリフォルニア州にある本屋がある。小説家ウキンストン・チャーチルが甚く好きで、お客が何か小説本の面白いのは無いかと訊くと、

「ございますとも。チャーチル先生の新版物で、無類飛切といふのがございます。」

と、直にこの作家の小説を賣りつけようとする。で、數ある本屋のなかで、チャーチル物の賣高にかけては、いつの月も記録を取つてゐるのはこの本屋だ。

ある時チャーチルがカリフォルニアに旅行をした事があつた。小説家の友人は、この機會を外さないで、作家と本屋とを結びつけようと考へたので、豫めその由を通じると、本屋は雀のやうに羽叩きをして喜んだ。

「結構ですな。かねて崇拜してゐる先生にお目に懸るなんて、だから本屋商賣は止められませんのさ。」

本屋は、お愛想のつもりで、チャーチルの作物は何一つ残さず讀んだ。なかには十回も繰返したのがあると言つて附足した。そして腹のなかでは、もしか夫に少しでも懸値があつたにしても、そんな事は後からすぐ辨償出来るとも思つてゐらしかつた。

本屋は小説家に紹介された。チャーチルはにこにこ顔で本屋の手を握つた。

「——君に聞きますと、大層私のお好きださうで。大きに有難う。」

「いえ、何う仕りました。……」本屋は恚う言つたきり、あとの言葉も次がないで、じつとチャーチルの顔を見つめた儘ぼんやりしてゐた。小説家は幾らか手持不沙汰な思ひをしたらしかつた。

チャーチルを宿屋に送り込んだ紹介人は、歸りに本屋の店を覗いてみた。本屋は椅子に凭れて籠のカナリヤを逃がしたやうな、浮かぬ顔をしてゐた。

「どうだ、愉快だつたかね、先生に會つて。」

「いや、はや。」と本屋は紹介人の聲を聴くと、椅子から立ち上つて來た。「チャーチル先生つて、あんな顔をしてゐる方なんですか。ほんとに失望しましたよ。結局お會ひ申さなかつた方がどれ程良かったでせう。」

困つた事には、本屋はそれ以後餘りチャール物を賣らうとしなくなつたさうだ。

夏 蜜 柑

日本の宴會には、よくお客同志の餘興盡しといったやうなものがあつて、それがあつたがために自分の隠し藝を、人前に押し賣りをする事の出来る樂しみもあるが、どうかすると、自分が藝無しのために飛んだ恥をかかされるのがよくある。亡くなつた山路愛山が、ある時何かの宴會で相客からうるさく隠し藝をせがまれて、例の負け嫌ひから、丁度夏座敷だつたので、女中に臺所から冷し素麵の桶を持ち込ませて、それをいきなり頭からひつかぶつて、素麵の雨の中から鶯鳥のやうな苦しい聲を振絞つて

「これは鯉の瀧のぼりてござい。」

といつたさうだが、お蔭で座敷は水だらけになつて、一座は白けてしまつたさうだ。

最近日佛交換展覽會の用事をすませて、佛蘭西から歸つて來た美術批評家のK氏が、まだ若

盛りで、白馬會の仲間達と一緒ににはしやぎまはつてゐた頃、こんなことがあつた。それも宴會での出來事だつた。

K氏は人も知つてゐる通り口が大きく頤が突つ張つて、俗にいふえらの出た顔で、あんどぐり口を開いたら、ラルウスの佛語辭典でも詰め込めさうな大きさである。宴會の藝づくしは廻り廻つてK氏の番になつた。氏はやをら座を立つて座敷の眞中に坐つた。そしてポケットから大きな夏蜜柑を一つ取り出して掌面にのせた。

「お目通りが叶ひましたら、これからこの夏蜜柑を丸ごと口の中に頬張つて御覽に入れます。」

かう言つて、K氏は件の夏蜜柑をそろそろ口の中に押し込みかけた。皆はをかしさに手を打つて笑ひ興じた。K氏の口も大きかつたが、夏蜜柑はそれよりもまだ大きかつたので、七分がた口の中にはひりははひつたが、残りの三分がまだ齒の外にはみ出してゐた。

「君もつとしつかりやつてくれ。まだ半分ばかり残つとるぢやないか。」

誰かが戯談半分に傍から喚いたものだ。すると、酔つたまぎれのK氏はいきなり拇指をもつて蜜柑をむりやりに口の中に押し込んでしまつた。

「あざやかだ。あざやかだ。」

皆がやんやと褒めそやすと、それにつれてK氏は二三度手をふつて踊るやうな眞似をしたが急に息づまりさうになつたと見えて、両手の指先を口の中に突つ込んで蜜柑を取り出さうとするらしかつたが、口一ぱいに溢つた蜜柑はどうしても取り出しやうがなかつた。見てゐるうちに、K氏の顔は眞青になつた。額からは汗がたらたらと流れた。鼻は鞆のやうに激しい息を吐いた。皆はうろたへ出した。

「駄目だ。駄目だ。前歯をすつかり抜かなくちや駄目だよ。」

「背中を金槌でどやしつけたら、一息に吐き出さないかしら。」

「こりやとても駄目だ、助かりつこはない。早く親類にでも知らせてやらなくちや。」

こんな風な言葉が邊から取り交はされた。氏の眼からは涙が流れた。鼻からは涕が流れた。口からは涎が流れた。美術批評家の最期は、こんなに惨めで、こんなに滑稽なものかと思はれた。すると、今まで黙つて見てゐた知慧者のM氏がついと立ち上つたと思ふと、ポケットから鉛筆削りの小刀を取り出して、いきなりK氏の口の中に突つ込んだ。

「危ない。何をする。」

「かうするんだ。」

M氏は外科醫のやうに落ちつき拂つた態度で、夏蜜柑の肉を切り取つて夫をK氏の口から引つ張り出した。こんな事を二三度するうち、口の中が漸とゆとりがつくやうになつた。K氏は指を突つ込んで残つた夏蜜柑の臓腑をやつとこさで引き出すことが出来た。

お蔭で生命だけは取り止めた。それ以來K氏は夏蜜柑の顔を見ると、急に蟲がかぶるやうに顔を眞青にした。

器用な言葉の洒落

細川幽齋はいろんなことに通曉してゐた。武術はいふに及ばず、その頃古今傳授を受けたつた一人の男は彼だつたといふので、歌の方の造詣もほぼ察しることができよう。茶も上手で、とりわけ料理がうまかつた。この方では相當うぬぼれを持つてゐた利休なども、幽齋の前には一寸頭があらなかつたらしく、ある時などはわざわざ頼んで、鶴の料理のお手前を拜見に往つたことがあつた。

幽齋が頓才があつて、歌の詠み口などが洒落てゐて、おまけに早かつたことは、かなり名高い話である。ある時、わが子の三齋と連れ立つて烏丸家を訪ねたことがあつた。主人の烏丸殿は細川が二人顔を揃へてゐるのを見て、

「細川二つちよつと出にけり」

といつて、ちよつかいを出された。すると、幽齋は即座に、

「御所車通りしあとに時雨して、」

とつけたので、烏丸殿も感心するよりほかには言葉がなかつたさうだ。その日、幽齋が暇乞ひして歸らうとすると、烏丸殿はわざわざ玄關まで見送つて出られたが、こつそり家來の一人に耳打ちをして、だしぬけに幽齋を後から玄關の式臺の上に突き倒させた。(おそろしく近代的なお公家さまで、歌よみを優遇するよりも苛めることを知つてゐる。)そしてこの歌上手の老人が蛙のやうな恰好をして、まごまごしてゐる間に、

「細川殿、たつた今一首所望いたす。」

と浴びせかけたものだ。すると、幽齋は腰を擦り擦り起きあがりざま、

「とんと突くころりと轉ぶ幽齋が、いつの間よりか歌をよむべき」

とらたつたので、悪戯好きなお公家さんも手を拍つて嘆賞した。

また、ある大名が幽齋を困らさうと思つて、どうぞ歌一首のうち「ひ」の字を十入れて作つてみてほしいと、難題をいひ出した。幽齋はちよつと思案をしたが、こんな手品師のやうなことは平素仕馴れてゐるので、何の苦もなく、

○「日の本の肥後の火川の火打石日日にひとふた拾ふ人人」

と、詠んでみせた。大名はこりずにまたまた難題を出して、今度は歌一首のなかに「木」を十本詠み込んでみせてほしいといひ出した。箱庭作りのやうに器用な幽齋は、何の雑作もなく、

○「かならずと契りし君が來まさぬに強て待つ夜の過ぎ行くは憂し」

と、有り合はせの檣やちと椽とちと桐とちと櫛しきと柿とちと椎とちと松とちと袖とちと桑とちとを詠み込んで見せたものだ。すると、大名はぜんまい仕掛の玩具でも見せられたやうに首を捻つて感心してしまつたといふことだ。

歌の話が出たから、これは幽齋のではないが、今一つ歌の話をつけ加へよう。連歌師の山崎宗鑑がある時、さるお公家さまを訪ねたことがあつた。公家は宗鑑に、自分は近頃えらい發明をした、それは歌のどんな上の句にでもくつつけることの出来る下の句だと、出来ることなら

農商務省に願ひ出て、專賣特許でも取つておきたいやうなことをいひ出した。宗鑑がどんな句だと、訊くと、公家は自慢さうに、

「といふ歌はむかしなりけり、」

といふのだと答へた。宗鑑は鼻の上に皺しわをよせて笑つた。

「御前、これはやつぱりお公家さまのお詠みになつた下の句でございますね。私共の方ではちと趣向が違ひまして、かういふ下の句をつけます。」

といつて「それにつけても金の欲しさよ」といふ句を書いてみせた。公家はそれを口の中でよんでみて、そしてそれを自分の知つてゐる古今集や百人一首のいろんな歌にくつつけてみたところが妙なことは、この下の句はどの歌にもよくついて、少しも縫目が見えなかつた。

「……それにつけても金の欲しさよ。」

實際よくつくと思はれたのに不思議はなかつた。そのお公家さんは、貧乏な宗鑑と同じやうに金が欲しくて仕方がなかつたのだから。

今一つそんな話をつけ足させてもらはう。——こなひだの歐洲戦役の當時、ある英國の軍醫が、アメリカの野戦病院を見舞つたものだ。すると、泣き面や、蠶かめつ面の病人たちのなかに、

たつた一人、機嫌よささうににこにこ顔で病床に横たはつてゐる一人の年若な傷病兵が眼についた。傷はかなり重いらしかつた。

「何か御用はないかな、あつたら何でも伺ふよ。」

軍醫は患者の顔を覗き込むやうにして言つた。

「有り難う。是非伺ひたいことがあるんですが、……」傷病兵は相變らずにこにこしながら言つた。「あなたならきつと教へて下さるでせうよ。」

「伺はうぢやないか。言つて御覽。」

軍醫は短い口髯を引つ張つた。それを横目に見ながら、病人は口早に次のやうにまくし立てた。

“Well, doctor, when one doctor doctors another doctor, does the doctor doing the doctoring doctor the other doctor like the doctor wants to be doctored, or does the doctor doing the doctoring doctor the other doctor like the doctor doing the doctoring wants to doctor him?”

當世批評家氣質

東京のある雑誌に美術記者を勤めてゐて、かなり評判のいい男がある。去年の秋の文部省展覽會に京都派の大家T氏の「河口」といふ作品を見た時、この美術批評家は一寸その繪の前で立ちどまつたが、

茶話全集

「かなり器用に描けてるな。だが、器用だけでは仕方がない。」と、獨語を言ひながら、さつさと通り過ぎて往つた。

その後、この「河口」の評判が、世間にやかましく言ひ囃されるやうになると、件の批評家は急にうろたへ出した。

「こんな筈ぢやなかつた。すると、俺が何處かに見落しをしたのぢやあるまいかな。」

美術批評家は慌ててまた文展の門口を潜つた。そして「河口」の前に立つて目を光らせた。すると、不思議な事には、以前見た折には、器用でばかし出来てゐると思はれた繪が、今度は

すつかり興味で出来てゐるらしく思はれ出した。

「旨い。ほんとに旨いものだ。」批評家は女に接吻する折のやうに、すれすれに近寄つてみたり、馬の價ぶみをする折のやうに少し離れてみたりした。「第一小松がよく描けてゐるし、それに波の調子が何とも言へない。」

批評家はそれからといふもの、毎日のやうに「河口」の前に立つた。見れば見る程いいのは此の繪の出来だつた。

「うまい。いつ見てもうまい。吳春だつて連も敵ひつこはない。」

批評家は町で友達に出會つても、家で妻の顔を見ても、すぐこの繪の話をした。もしか自分の裏口に兎が飼つてあつたら、批評家は厭といふ程その耳を引張つて、この畫の噂を吹き込みに相違なかつた。

批評家はこんなにまでして「河口」の評判を立てたが、たつた一つぢかに作者に出會つて、この話をしないのが残念で堪らなかつた。で、思ひ立つて京都にやつて来てT氏に會つてみる事にした。

T氏は都合よく家にゐた。美術批評家はこの作者の前に坐つて、魚のやうに口さきを尖らせ